

はじめに

鎌倉の町を歩くと、大きな石碑が目にとまる。漢字と片仮名交じりの文語調で、少し読みづらいが、鎌倉の史蹟¹を詳しく説明したもので、鎌倉の町中至る所に見受けられるこの石碑は、鎌倉市史によると「史蹟指導標」²と記載されており、建立は戦前にまで遡る。鎌倉「八雲神社」の宮司・小坂藤若（写1）³は、指導標の建立団体、鎌倉町青年団の副団長として、この指導標が建立された経緯を記録に残した人物である。本稿は、この指導標が建立された経緯について、建立団体の一員として携わった小坂が出版した手記『随筆 あとの鴉』⁴の中に所収された日誌と年譜、雑誌への小坂の寄稿文「郷土を愛するが爲に」（写2）⁵を元に、大正から昭和戦前期の鎌倉において、どのような人々が、どのような目的で、史蹟指導標を建立するに至ったのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とする。

史蹟指導標は、碑文の末尾に建立年と建立団体の記載があるため、年代ごとの建立数、および建立年代と建立団体の関係性を掴むことができる（表1）。結果、そこに刻まれた建立団体は、一定の建立年代ごとに変化していくことが判明した。大正6年（1917）から大正10年（1921）までの鎌倉町青年会が16基、以後、大正11年（1922）から昭和14年（1939）までの鎌倉町青年団が52基、昭和15年（1940）と昭和16年（1941）の鎌倉市青年団が6基、戦後、昭和31年（1956）の鎌倉友青会⁶が3基⁷に、大正期の鎌倉同人会3基⁸を合わせて、合計80基となる（表1）。この80基はすべて鎌倉市内に存在するが、そのうち、主に山に囲まれた中世以来の鎌倉の中心、戦前の旧鎌倉町の町域に所在する碑が72基に上る。

今回、史蹟指導標の建碑を論じるに際し、指導標の現状調査を行い、80基すべてが欠けることなく存在することを確認した⁹。この調査に基づく、石造物・分布状況・碑文の各分析については、別稿に委ねることとし、本稿では、史蹟指導標の建碑について、誰が、何のために、この石碑群を建立したのかを、小坂の記録などを元に、建立の過程を辿りながら、明らかにしていきたい。

史蹟指導標を取り上げた先行研究については、昭和 56 年（1982）発行の稲葉一彦『鎌倉の碑めぐり』¹⁰ がある。この本は、すべての史蹟指導標を取り上げた上で、発行時の所在地と碑文の写しを記載し、碑文内容の歴史的な解説を加えており、現状で最も史蹟指導標について言及された文献と言える。但し、あくまで史蹟指導標の紹介が中心であり、サイズや形などの石造物としての調査がなされていないため、労作ではあるものの、単なるガイドブック的な資料紹介に終始してしまい、残念ながら研究論文とは言い難い。しかし、研究の端緒としては、大いに参考となる文献である。

他の文献としては、雑誌『私のかまくら』が、数号にわたる連載特集を 1995 年と 2004 年の 2 回組んでいる¹¹。また、『鎌倉市史 近代通史編』では、鎌倉町青年団の記述の中で、「史蹟指導標」という名称と共に 2 頁に渡り記載があり、その建立過程や建立団体について記している¹²。更に史蹟指導標の立地について、鎌倉にある「通り」の空間特性を探る青木佑太の研究では、史蹟指導標と「通り」の関係性に着目し、「通り」に面した史蹟指導標は 34 件と言及している¹³。しかし、そこから、史蹟指導標の立地についての考察を深めてはいない。この様に、史蹟指導標に触れたいくつかの論考は存在するものの、史蹟指導標単体を取り上げ、十分に論考を加えた研究論文を特に見い出すことはできない。

なお、史蹟顕彰についての先行研究は、19 世紀の史蹟記念碑から史蹟論を述べた羽賀祥二¹⁴ や、近代における古都奈良と京都の歴史顕彰について述べた高木博志¹⁵ があり、近代の歴史顕彰という観点からは、矢野敬一¹⁶ があるが、特に鎌倉を中心に歴史顕彰を扱った研究はない。また、明治から戦前の青年団体研究では、田中克佳・船田元¹⁷、佐竹智子¹⁸ など、多く存在しているものの、史蹟指導標を建碑した鎌倉町青年会・鎌倉町青年団については、『鎌倉市史 近代通史編』に記述¹⁹ があるのみで、単体の研究は存在しない。以上が、先行研究の概観である。以下、前段として、史蹟指導標の最初の建碑に関わった青年会と鎌倉同人会の誕生からの経緯と、小坂の青年団役員就任までの指導標建碑について述べた後、実際に小坂に関わった指導標建碑事業の詳細へと論を進めていきたい。

第1章 史蹟指導標の建碑活動前史

第1節 別荘地鎌倉の形成と鎌倉町青年会

史蹟指導標の建碑活動前史として、建碑組織「鎌倉町青年会」の設立経緯から述べていきたい。明治期の鎌倉は、明治22年(1889)の横須賀線開通による鎌倉駅の設置により、急速な発展を遂げ始めていた。当時、鉄道開通による大衆化は、相模湾沿岸に一気に海水浴場を増加させ、一つの大きな地域感覚「湘南」が形成される²⁰。そして、明治20年代以後「湘南」は別荘地として発展するが²¹、その中で鎌倉は、従来の神社・仏閣などの名所・旧跡に、西洋的別荘によるモダンな空気が共存し、独特の個性を創出し、湘南の中心的別荘地として発展²²、明治45年(1912)には480戸と²³、湘南地区最大²⁴の別荘数を誇った。しかし、この別荘建設による開発は、鎌倉の町を大きく変貌させると共に²⁵、「別荘族」と呼ばれる大量の移住者を迎えるに至る。つまり、近世以前の鎌倉とは全く継続性のない新しい「近代鎌倉」が造成されたのである。この「中世鎌倉」が、遙か遠い存在となってしまったことが、まさに史蹟指導標を生み出す要因の一つとも考えられる。

こうして、鎌倉が別荘地に変貌した後の明治44年(1911)3月12日、「鎌倉町青年会」は発足した²⁶。会長は、鎌倉町長であった犬山初蔵、副会長は、鎌倉小学校長の相沢善三が就任し、各字に13支部が置かれた。ここで、会長が青年ではなく、町長が務めていたという事実疑問が生じる。これは、鎌倉が明治に入ってから新たに開発された町であった事が関係していた。この点について、詳しく述べていきたい。元々、近世日本の各村落には、若者組という青年組織が存在した²⁷。この組織が明治時代になり、青年会として近代的に再構築され、特に、日露戦争後の明治30年代後半から明治40年代初頭にかけて激増した²⁸。これは、明治41年(1908)に煥発された戊申詔書の影響も大きかった²⁹。

そして、この動きが鎌倉周辺へと至るのは、全国的に見ても遅い明治40年代に入ってからであった。先述の通り、鎌倉は、明治に入りその姿を大きく変えた町である。従って、鎌倉町では、近世の村落を起源としない様々な組織が、新規に創設されていったと推察され、そうした組

組織の一つとして、鎌倉町青年会も、江戸時代の若者組を起源としない、全く新しい組織として誕生した可能性が考えられるが、新組織として立ち上げられるためには、背景として何かしらの外部からの働きかけが必要である。その青年会発足に影響を与えた団体として見えてくるのが、鎌倉郡教育会である。

鎌倉郡教育会は、明治20年(1887)8月に創立された神奈川県教育会の支部で、神奈川県教育会は関東連合教育会に加盟し、帝国教育会の一支部であった³⁰。上部団体である帝国教育会は、文部省の翼賛団体として、教育の関する様々な問題について組織的に活動する組織で³¹、その傘下団体である鎌倉郡教育会も、会長は鎌倉郡長が務め、事務所は鎌倉郡役所内に置かれるなど、行政の下部組織的位置づけの団体であった³²。この鎌倉郡教育会の明治四十三年度事業計画書一項目目に、戊申詔書に則った「町村青年会奨励補助」が掲げられ、実際に三百二十円が支出されているのである³³。

明治時代の社会教育（一般大衆を対象とした教育という意味で、通俗教育と呼ばれた）は、明治30年代までは図書館などの施設整備が中心であったが、日露戦争以後、通俗教育の振興として青年会の育成が加わった³⁴。従って、それまで青年会が全く未整備の鎌倉周辺地域に対して、教育会が通俗教育の振興を目的とし青年会発足に動く事は、自然な流れであったと言える。実際、鎌倉郡の各町村における青年会の発足は、明治43年（1910）から翌年の間に集中しているが、これは先述の鎌倉郡教育会の財政支援が元となり、郡内各青年会が発足した事の裏付けとなり得る³⁵。この様に、鎌倉町青年会の発足は、鎌倉郡教育会の主導により行われ、行政直結の公的機関として結成された。この事が、青年会長を町長が務めるに至った所以と思われる。

第2節 鎌倉同人会の設立と史蹟保存活動

鎌倉町青年会に史蹟指導標建碑のきっかけを与え、自らも少数ながら建碑を行った「鎌倉同人会」の設立を見ていきたい。大正に入ると、鎌倉は別荘地として最盛期を迎える。その中で、鎌倉に近い横須賀港を基地とする海軍軍人など別荘と言いつつ常住している人々が多数おり、定住目的で移り住む者も増加した³⁶。しかし、これら常住者の住居は「お別荘」と呼ばれ、従来からの町民と別荘所有者、転入者との間にはある程度の距離が見て取れた。彼ら別荘族は、社会的に著名な高額所得者が多く、その存在は鎌倉町にとって単なる多額納税者以上の意味を持つようになり³⁷、また、別荘族自身も鎌倉に関わる志向を持ち始める。

その中の動きの一つが、別荘族の組織化である。まず、明治41年（1908）親睦融和が目的の鎌倉倶楽部が設立³⁸されると、大正4年（1915）に、鎌倉倶楽部のメンバーである医師の勝見正成³⁹を中心に、史蹟保存、衛生・教育の普及、インフラの利便性向上などを目的として設立されたのが、鎌倉同人会である⁴⁰。勝見と共に設立に参画した伯爵陸奥広吉は、同人会を作るにあたり、町政に直接関わらず、「間接に後援者として其の改善を補助する」と述べている⁴¹。これは、個々の社会的地位や影響力により、直接国や財界などに働きかけ、町を側面から援助することを目指したものであった。従って、実質的には、町政を含めかなりの影響力を持っていたと言える⁴²。

ところで、近代鎌倉における史蹟顕彰活動の端緒としては、鎌倉保勝会の設立が挙げられる。鎌倉保勝会は、明治18年（1885）横浜の実業家や地元鎌倉の名士、寺社などが発起人となり、維新以来困窮した鎌倉の寺社の救済、史蹟の保存などに貢献することを目的に設立された⁴³。但し、具体的な活動内容は残念ながら伝わっていないが、唯一、現代まで残る遺産として挙げられるのが、明治43年（1910）に行われた「鎌倉十橋」、「鎌倉十井」への石碑建立活動である⁴⁵。この石碑は、非常に小さな細長の四角柱で、井戸・橋の名称のみが刻まれ、特に説明書きなどはないが、鎌倉における歴史顕彰活動の先駆けとして注目される⁴⁶。そして、このような史蹟保存活動を引き継いだのが、鎌倉同人会となる。

鎌倉同人会が行った活動は、鎌倉駅の改築、郵便局の新築、公衆便所の設置など多岐にわたるが⁴⁷、その中の一つに、史蹟保護の取り組みがある。同人会は、規約の第一条に「歴史的物及ビ勝地保護」を謳い⁴⁸、最初の指導標が建てられる2年前の大正4年（1915）設立当初から、陸奥広吉を中心に史蹟の保護に積極的に取り組んだ⁴⁹。大正6年（1917）に行われた荒れ果てた段葛の整備⁵⁰や、若宮大路の松並木の保護⁵¹などである。また、陸奥は、もう一つ歴史に係る取り組みとして、社寺の宝物・古文書の調査蒐集⁵²を行っており、震災後には、同人会として「鎌倉国宝館」建設に尽力することとなるが、この様な歴史に造詣の深い人物の活動が鎌倉町内に歴史への関心を呼び起こしたことは言うまでもないであろう。この様な別荘族の高い文化レベルの下地があった点は、鎌倉町青年会が史蹟指導標の建碑を開始する背景として重要であると考えられる。

第2章 史蹟指導標建碑の開始

第1節 史蹟指導標建碑開始当初の概要

大正6年（1917）鎌倉町青年会は、史蹟指導標の建碑を開始するが、その詳しい経緯については、残念ながら記載された管見の限り、資料は確認できていない。但し、同時期の鎌倉町の財政面の施策については、議会資料から建碑に関わると思われる施策の一部を認めることができる。その施策とは、大正3年（1914）から始まる鎌倉町の旧蹟保存施策についてである。

鎌倉同人会が結成される3ヶ月前の大正3年（1914）10月10日、鎌倉町会は旧蹟保存基金蓄積及管理規定を可決し、5,000円蓄積してその利子を旧蹟保存資金に充てることとされた^{53 54}。そして、2年後の大正5年（1916）7月、鎌倉町は神奈川県に対し旧蹟保存費補助願を提出、翌大正6年（1917）2月9日に県から118円の補助費の交付を受けている⁵⁵。これは、鎌倉町青年会が初めて5基の史蹟指導標を建碑する一ヶ月前の出来事である。後述するが、2年後の大正8年（1919）5月31日に、青年会は自ら旧蹟保存費補助願を町会に提出し、同年11月25日に旧蹟保存費150円の交付を受けている⁵⁶。従って、おそらく大正6年の補助費も、建碑の費用に使われた可能性が高い。

更に、この補助願は同年7月16日にも県に提出され、同年12月26日に24円が交付されている⁵⁷。鎌倉町青年会は、大正6年（1917）3月に5基、続いて、翌大正7年（1918）3月に更に5基、合わせて10基の史蹟指導標をこの最初の2年間に集中して建立しているが、前章で述べた通り、鎌倉町青年会は鎌倉同人会とは異なり、鎌倉町に直結した組織であったことを鑑みれば、この118円が、この2カ年に渡る指導標建碑のための補助金であった可能性は高い。このことから、史蹟指導標の建碑事業は、鎌倉町青年会から自発的に出てきた事案ではなく、鎌倉町の旧蹟保存施策として立案されたことが推測される。

次に、指導標建碑開始における鎌倉同会の影響について見ていきたい。発足当初の同会は前章で述べたとおり非常に活動的であった。その1つとしては、大正7年（1918）に同会自らが行った史蹟指導標建碑が挙げられる。『鎌倉同人会五十年史』によると、同会は、発会と時

を経ない時期から、鎌倉町青年会の「大会の際などには講師として委員の中誰かが話をしたり、精神的に後援することは怠らず続け」⁵⁸ られたと言う。

元々同人会は、青年会に対して後援する関係性を構築していた。そのため、同人会による段葛や若宮大路の整備などの史蹟整備活動について、青年会の会員に意識を浸透させ、建碑活動を促す素地があった事は否定できない。『鎌倉同人会五十年史』には、建碑の開始について、「鎌倉の将来を担う人々によって、こうした事業が創められたことは、同人会を非常に喜ばせた」⁵⁹ とある。

大正7年(1918)、同人会はまず、「六地藏(饑渴島)」⁶⁰ と「盛久頸座」の2ヶ所の史蹟整備を行った。同人会は発会当初より、荒れ果てている「六地藏(饑渴島)」の保存⁶¹を緊急に行うべき事業5つの中の1つに取り上げ、3坪の土地を買い取り、周囲を石で積み、芭蕉の句碑と六地藏を据え、大正7年(1918)11月に修復整備した⁶²。他方、「盛久頸座」については地域1坪を買収し、散らばった石碑類を整理した⁶³。

そして、この2ヶ所に自ら史蹟顕彰碑を建碑した。その2基の内、「饑渴島」の形状が、大正前年から本年にかけて初めて建碑された青年会の史蹟指導標と酷似しており、形状を合わせて作られたと考えることができる。なお、一方の「盛久頸座」については、本体の高さ75.5cmと青年会建立の指導標の半分以下であり、形状も平らで字も小さく碑形が全く異なっている。そのためか、鎌倉町青年団は、昭和10年(1935)に新たに史蹟指導標「主馬盛久之頸坐」を同人会の顕彰碑と同じ敷地内に建碑しなおしている点は同人会の顕彰碑を否定しているようにも感じられ興味深い⁶⁴。

これらの対象はどのように選定されたのか。後年、鎌倉町青年団の副団長となる小坂藤若は、その日誌の「大正十年五月十六日」の項に、鎌倉町青年会が鎌倉町青年団と改名するに際し、「今回から団に脱皮した青年団が、従来町の天下り式の会長制を排し、民間から団長を推挙する立前になったので、指導標も団の自主性において建設すべきであるとの自覚の下に、左記三カ所を本年度建設予定地に指定した。」⁶⁵と記している。これは逆に言えば、鎌倉町青年会時代は、団の自主性においては建設されていなかった、即ち、青年会ではない別の組織、ここまでの

後援経緯から考えると鎌倉同人会の可能性が高いが、その組織の指導の下に建碑箇所が決定されていることを意味しているのではないだろうか。つまり、鎌倉町青年会による指導標建碑の開始は、鎌倉町や県の財政的支援の元に、鎌倉同会の指導・後援を受けて始まったと考えられるのである。

第2節 鎌倉市深沢図書館蔵「碑表建設願」と「承諾書」から見える建碑の様相

史蹟指導標の建立費用、および、建立場所の土地使用について、鎌倉市深沢図書館蔵「碑表建設願」と「承諾書」をもとに検討したい。大正6年（1917）の建碑開始から、大正7年（1918）までの2年間で、10基の指導標を建立した鎌倉町青年会は、先述のように翌大正8年（1919）11月25日に旧蹟保存費150円の交付を受けている⁶⁶。そして、翌大正9年（1920）から基本的に毎年3基ずつの建碑が、昭和16年（1941）まで21年間に渡り、継続することとなるのである（表1）。

この建設費については、従来以下のような評価がなされてきた。例えば『鎌倉市史』には、「青年団費と県・町市よりの補助で賄われ、」⁶⁷と書かれ、『鎌倉教育史』には、「大正時代、この碑を建てるのに諸経費を入れて約二百円を要したというが、これは、青年会の会費（団費）、鎌倉町の補助、それに県費の補助を加えてまかなっていた。」とある⁶⁸。

そして、この記述を裏付ける史料がいくつか存在する。まず、大正15年（1925）に鎌倉町青年団副団長の小坂藤若は、鎌倉右門社発行『鎌倉』⁶⁹の文章の中で「此の事業は年々町費や県費の補助を仰いで遂行」⁷⁰と述べている。また、昭和16年（1941）鎌倉市青年団発行『鎌倉』⁷¹では、その「緒言」において団長の蔵並長勝が「神奈川縣及び鎌倉市當局の援助の下に、史都鎌倉の數多い埋もれた史蹟舊址を探ね、史蹟指導標を建設し來つた。」⁷²と書いている。

くわえて、本件で最も重要な史料となるのが、鎌倉市深沢図書館所蔵の史料「碑表建設願」（史料1～3）（写3）である。この史料は、昭和16年（1941）に建立された3基の史蹟指導標の建設願で、同じく鎌倉市深沢図書館所蔵であり、戦前の町役場で指導標の碑文をまとめた史料である『指導標碑文集』⁷³（写4）に添付されている。

この『指導標碑文集』は、戦前に建碑された同人会以外の指導標74基について、その碑文を原稿用紙に手書きし、建立順に綴じられたもので、表書き（写4①）より本碑文集は鎌倉町役場の編集であることが分かる。そして「碑文」文案が手書きされた原稿用紙の枠外左下には、赤で「鎌倉町震災誌原稿用紙」と印刷されている（写4②）。

ちなみに『鎌倉町震災誌』⁷⁴は、関東大震災の被害状況と復興の記録について、鎌倉町役場がまとめたもので、鎌倉震災志編纂委員会委員として編纂作業に専従していたのが、鎌倉町青年団副団長小坂藤若であった⁷⁵。従って、鎌倉町青年団の関係史料に『鎌倉町震災誌』用の原稿用紙が使われている点も、何ら違和感はない。残念ながら、この史料がどのような経緯で鎌倉市深沢図書館の所蔵に至ったのかは定かではなく、推測の域を出ないが、『鎌倉町震災誌』用原稿用紙が使われている点から、当時の青年団内部で作成されたものの可能性は高いと考えられる。

その中身は、基本的には各々、原稿用紙1枚に「碑文」文案が1基ずつ書かれ、建立年代順に綴じられている。筆跡を見る限り「鎌倉町震災誌原稿用紙」で統一された様式で同一人物の筆跡と思われる頁は、昭和11年(1936)の碑文で途切れ、昭和12年(1937)以降は、原稿用紙や筆跡が一年ごとに変っていく。おそらく、11年までは建立済指導標碑文の写しであり、12年以降は新たに建碑した碑文の清書を1年ずつ綴じていったものと推測される。こうした状況をふまえるなら、この『指導標碑文集』に綴じられている「碑表建設願」も、原資料である可能性は高いと考えられる。

つぎにその「碑表建設願」について検討してみたい。まず、宛先は鎌倉警察署宛てであり、青年団長名で作成されたものである。その内容の詳細をみると、この4項目目に工費予算の額が示されている。具体的には「四、工費豫算 百九拾圓也」(史料1~3)と記され、この表記は3基とも同一数値である。そして、この建碑の財源について、6項目目に「六、工費支途 本團費及縣市補助」(史料1~3)とあり、『鎌倉市史』などの記述と一致する。

こうして見てくると、昭和16年(1941)段階で190円と示されており、3基で合算すると570円の額となる。ちなみに、大正8年(1919)の町からの補助金は150円であった。物価の変動はあるであろうが、青年会・鎌倉町・神奈川県で、150~200円づつの費用を分担し、一年間に3基の建碑を継続していた事が推察できる。また、鎌倉町においては、前節で述べた「旧蹟保存基金」の利子を元にした補助金への充当が行われていたであろう事は、想像に難くない。

次に、史蹟指導標がどのような土地に建てられたのかを見ていきたい。『鎌倉市史 近代通史編』では、3頁に渡り鎌倉町青年団について述べているが、その約半分を史蹟指導標の建碑活

動に割いている⁷⁶。そこに、次の様な興味深い記述が見られる。それは「碑の建つ土地の多くは私有地であり、無料使用の承諾書を得ての建碑であった」との記載部分である。先述した『指導標碑文集』には、この承諾書が添付されている。昭和16年（1941）建碑3基の前掲史料「碑表建設願」（史料1～3）に付属するもので、「碑表位置図」（写5）、と「承諾書」（写6）の2点がある。

「碑表位置図」（写5）は、正面と横からの図面（3基とも同一）⁷⁷と、設置場所の手書きの地図が記されている。そして、より重要と思われるのが、設置場所の土地所有者が署名捺印した「承諾書」（写6）であろう。この書面には3基とも住所と土地所有者名以外は同一の文面で、次のように記されている。

承諾書

碑表建設ノ為　〔建設地住所

〕　ノ土地無料使用ノ件

承諾ス

〔日付〕

〔土地所有者住所〕

土地所有者　〔氏名〕捺印

鎌倉市青年團長藏並長勝殿

以上より、史蹟指導標は私有地に建碑され、土地所有者は無償で土地を提供していたことが明らかとなり、『鎌倉市史』の記述を追認するものといえよう。

今回、実際に史蹟指導標を調査した際、寺社の敷地内のみならず、明らかに私有地と思われる場所に建ついくつかの史蹟指導標に対して筆者が抱いた疑問はここに氷解したが、逆に戦後、青年団が消滅した後も、私有地にあるにもかかわらず史蹟指導標が全基残ったという事実に関しては、率直に驚きを禁じ得ない。

第3節 鎌倉町青年団への改名と規約に見る組織構成

大正10年(1921)鎌倉町青年会は鎌倉町青年団へと改名された。この改名は、単に名前が変わっただけではなく、団体の性格が変わる契機ともなった。そのことは、建碑活動にも少なからず影響を与えていると考えられる。そこで、その経緯について検討してみたい。

大正5年(1916)の青年団中央部の発足により、青年会の全国組織化が図られ、各地の青年会は青年団として再編がなされていった⁷⁸。この動きが最初に鎌倉に波及したのが、大正7年(1918)3月28日の鎌倉郡連合青年団の発足である⁷⁹。鎌倉町青年会は、郡内16町村の青年会⁸⁰の一つとして、この鎌倉郡連合青年団に加盟する⁸¹が、郡内では、村岡村青年会の大正6年(1917)改名⁸²を端緒に加盟青年会の改名が進んでいた。そこで、鎌倉町青年会も、その動きに倣い、鎌倉町青年団となる。

第1節で取り上げた小坂藤若の日誌「大正十年二月二十四日」の項には、「午後五時鎌倉小学校で青年会幹部会開催。会名について、従来青年会と称したが今後青年団と改めることを決定。」⁸³とあり、改めて鎌倉町青年会と鎌倉町青年団は、改組ではなく改名であり、双方が継続組織であったことが分かる。同日の項は、「次いで役員は、団長に村田久吉、副団長に鶴見欣之輔、山本和三郎、幹事に宮本慶次郎、関佐平次、進藤舜、当間行浩、小坂藤若が推薦され、これに決定した。」と続き、ここから小坂は、鎌倉町青年団役員として活動を始める。

次に、同じく第1節に記したとおり、同日誌の同年「五月十六日」の項に「今回から団へ脱皮した青年団が、従来町の天下り式の会長制を排し、民間から団長を推挙する立前になった」⁸⁴とあり、団長に推挙された村田久吉は、初の民間人であった事が分かる^{85 86}。これは、大正9年(1920)の内務省文部省第三次共同訓令および通牒において、青年会内部でのリーダー就任の容認が反映されたものと考えられる⁸⁷。また、この団長推挙方法の変更は、従来の鎌倉町との密接な関係からの脱却を意味し、団体の性格がより主体性を持ったものへと変化したことを表しており、史蹟指導標の建碑活動についても、1つの転換点となり得る事象であった。

ここで、その変化を見る前に、鎌倉町青年団の組織構成について、規約をもとに考えてみたい。青年団の機関紙とも言うべき『團報』は、昭和 14 年号 1 冊のみが現存し、神奈川県立図書館に所蔵されている⁸⁸。昭和 14 年（1939）という日中戦争の真っ只中の発行であるため、内容は非常に戦時色が強く⁸⁹、この号の空気感を大正から昭和初期の鎌倉町青年団にそのまま当てはめることは危険であるが、その中に鎌倉町青年団規約⁹⁰が掲載されているので、そこから団の実像を見ることは可能であろう。以下、条文から判明する点を順に見ていきたい。

まず、第一条に事務所を「鎌倉町役場ニ置ク」とある。鎌倉町青年会の会長が町長であった点は前章で述べたが、青年団移行により民間から団長を推挙する事となっても、鎌倉町との関わりは継続していたことが伺える。

第三條 本團ハ鎌倉町ニ居住スル年齢満十五才ヨリ二十五才マデノ男子（正團員）ヲ以テ組織ス 但シ學籍ニ在ルモノヲ除ク
正團員ノ年齢ヲ越ヘ四十才マデノモノヲ特別團員トス

入団の基準として、正団員を鎌倉町に居住する 15 歳から 25 歳までの男子とすると共に、26 歳から 40 歳までの者を特別団員としている。小坂が役員に選出されたのは 26 歳のため、役員は特別団員からの選抜であった可能性が考えられる。また、特別団員の存在は、必然的に 40 歳まで団員として活動できることとなり、鎌倉町青年団が特に青年に限らない組織であった事が明らかになった。

第八條 團長副團長ハ評議員ニ於テ之ヲ選舉ス 但シ團長ハ鎌倉町居住者ヨリ之ヲ選ビ副團長ハ團員中ヨリ之ヲ選ブ
理事ハ團員中ヨリ團長ノ推薦ニヨル

団長は鎌倉町居住者、副団長は団員から、共に各支部長で構成される評議員の選挙によって選ばれる。このことから、団長に年齢制限がなかった事が分かる。

第九條 顧問ハ町長町立各學校長及ビ前團長前々團長ニ之ヲ囑託ス

顧問は 町長・町立各學校長・前團長・前々團長とされ、ここにも町役場との関係性が読み取れる。以上から、鎌倉町青年団は、青年に限らず構成員の幅の広い、そして、町役場との強い関係から、鎌倉町に一定の影響力を行使できる存在であったと推測される。

第4節 鎌倉町青年団改名後の建碑活動の実態

小坂は、幹事就任によって初めて青年団の活動運営に参画し、史蹟指導標の建碑活動にも携わることとなるのだが、小坂という一幹事が指導標建碑に深い思いを抱く契機として、改名と共に団体の活動がより主体性を持ったものへと変化した点は非常に大きかったと言える。以下、小坂の日誌から青年団幹事による主体的な建碑の過程を明らかにしていきたい。

小坂の日誌には、史蹟指導標の建碑箇所について、決定過程を詳細に記した部分がある。先述の大正10年（1921）の「五月十六日」の項には、青年団になり民間から団長を推挙することとなったので、「指導標も団の自主性において建設すべきであるとの自覚の下に」青年団幹部で建碑箇所を決定している⁹¹。建碑箇所は、「東勝寺趾、文覚屋敷趾、上杉管領屋敷趾」に一旦決定したが、翌日、「五月十七日」の項で、

役場に青年団幹部が集まり、昨夜指定した旧蹟保存指導標の建設予定地を実地踏査した。

その結果、地理、分布等の条件について多少異なる意見も出て、彼此対照した結果、左の三ヵ所に変更することとなった。

文覚屋敷趾、刀工正宗邸趾、畠山重保墓⁹²

とあり、実際に現地調査の上で場所を決定している点、また、すぐに代替箇所が示されているので、あらかじめ複数の候補地があり、そこから建碑箇所を決定していた点が明らかとなる。

しかし、翌大正11年（1922）3月の実際の建碑箇所は、「文覚上人屋敷迹」、「扇谷上杉管領屋敷迹」、「畠山重保邸趾」の3ヵ所であり（表1）、刀工正宗邸趾は当初案の上杉管領屋敷趾に変更されている。最終的に以後も刀工正宗邸趾の建碑は実現していないため、建設予定地において建碑できない何らかの事情があったことが考えられる。

次に、この3基における実際の建碑時の様子も、翌年の日誌に出てくる。大正11年（1922）の「五月一日」の項に、

今日午前九時から村田団長以下私たち幹部一同出動した。先ず午前中に一の鳥居脇畠山六郎重保墓所を、午後扇ヶ谷上杉管領屋敷趾と文覚上人屋敷趾の三ヵ所三基を建立した。⁹³

とあり、幹部総出で、3基を一日がかりで設置した事が分かる。逆に言えば、業者任せにせず、幹部自身の手で建てていた事となり、いかに青年団がこの建碑事業を重要視していたかの証左といえよう。

この様に、指導標の建碑を行う過程で、小坂ら青年団幹部は、自ら建碑する史蹟を選定した上で、自ら設置作業までも行っている。そこには、団の主体的な活動としての史蹟指導標建碑に対する姿勢が垣間見えると共に、行政や鎌倉同人会など、それまで後援する立ち位置にいた組織からの自立する姿も見えてくる。『鎌倉同人会五十年史』の記述によれば、鎌倉同人会の鎌倉町青年団への後援は大正10年（1921）の青年団改名後も継続され、同年8月には、鎌倉町青年団長村田久吉が鎌倉同人会の理事に就任したとある⁹⁴。これは、両者の「関係を更に円滑ならしめるため」と記しているが、逆に、想像をたくましくすれば、この事は、青年団の自主性が強まることにより、両者の関係を円滑ならしめる必要性が生じたと言えなくもない。

また、大正15年（1925）には、鎌倉同人会自ら「玉縄城跡」と「木曾冠者義高之塚」の2基の史蹟指導票を建立している。この2基は、鎌倉町域外に立地し、小坂村・玉縄村各青年団の労力奉仕により建設された⁹⁵。更に、昭和7年（1932）鎌倉郡内の村岡村にある村岡城址への同村有志による建碑についても、同人会に援助をもとめてきたので、助力している⁹⁶。この様に、鎌倉町域外であっても鎌倉に関連する史蹟の顕彰については、鎌倉同人会が主管となり活動していた事が分かるが、逆に言えば、鎌倉町域内については、青年団の自立を認め、役割を任せる様になっていたと言えるのではないだろうか。

第3章 鎌倉町青年団副団長小坂藤若の寄稿文に見る建碑の目的

第1節 鎌倉町青年団副団長小坂藤若と関東大震災

本章では、青年団幹事となり、史蹟指導標の建碑活動に実際に関わることとなった小坂藤若が、その活動を通じて自ら建碑の意義について問いただし、郷土鎌倉を自らのアイデンティティとして認識するに至る経緯を明らかにしていきたい。そこで大正15年（1925）に小坂が史蹟指導標について寄稿した文章に焦点を当てるとともに、ちょうどその時期に小坂が取り組んでいた『鎌倉震災誌』⁹⁷の編纂についても振り返り、その寄稿文との関わりを考えていきたい。

大正12年（1923）9月1日、関東大震災が発生した。相模湾が震源であったため、鎌倉の被害は甚大で、各所から火災が発生し町の中心部を焼失、更に津波の直撃により海岸地区が流失した⁹⁸。『鎌倉震災誌』によると、当時の鎌倉町の戸数は4183戸で、そのうち全潰1455戸、半潰1549戸、全焼443戸、流失113戸と実に87%の建物に被害が出たこととなる⁹⁹。但し、死亡者は412人と、東京、横浜の数万人とは大きな開きがあった。つまり、鎌倉における被害の中心は、建造物の損壊であり、江戸時代に多く再建された寺社と明治時代以来建てられてきた別荘に多大な被害をもたらしたのである。

その救護活動、警備活動の中心となって対処したのが鎌倉町消防組、鎌倉町在郷軍人分会、鎌倉町青年団の三団体であった。別荘族の組織である鎌倉同人会、鎌倉倶楽部が、寄付等財政面の支援や、医薬品の取り寄せ等マネジメント的活動の中心として貢献した¹⁰⁰のに対し、三団体は、軍隊、警察と共に実際の現場における支援活動の中心として多大な貢献をした^{101 102}。

この三団体の連合体は、救護活動がひと段落した翌年正月の段階で一旦解散するが、これらを契機として三団体の結びつきが深まると共に、町内における三団体の重要性が増し、翌年には三団体の合同体「鎌倉三星会」が発会¹⁰³、三団体は終戦まで鎌倉において一大勢力となっていた。すなわち、鎌倉町青年団の鎌倉町内における存在感が大きなものとなっていったと考えられる。

とくに鎌倉町在郷軍人分会と鎌倉町青年団¹⁰⁴は、元々密接な関係にあった。両団体を兼務した小坂の日記には、度々、在郷軍人会と青年団の連合総会への出席の記述が出てくる¹⁰⁵。これは、小坂の様に鎌倉町在郷軍人分会と鎌倉町青年団に同時加入する男性が多かった事を表している。こうした密接な関係を更に発展したのが、関東大震災における救護・警備活動だった訳である。

震災から2年後の大正14年（1925）、30歳となった小坂藤若は、鎌倉町会において、鎌倉震災志編纂委員会委員に委嘱され、以後編纂作業に専従することとなる¹⁰⁶。『鎌倉震災志』は、先述の通り、甚大な被害を鎌倉にもたらした震災の記録を後世に伝えるために、「大震災前後の事実を正確に記録することを目的」¹⁰⁷として、鎌倉町役場によって編纂された。その「鎌倉震災誌序」には、次の様に書かれている。

編纂は鎌倉町の任命せる委員若干名の協議に依り、主として委員小坂藤若君が之に當つた。

この書は、319頁にもおよぶ膨大な頁数の書物であり、編纂期間は5年にもおよんだ。その間、7名の編纂委員が任に当ったが、特に小坂が中心となって執筆にあたっている。この事に関しては、巻末の「編後に」に詳しいので、一部抜粋したい¹⁰⁸。

△私は青年團を代表する者であるが、一方役場に勤務する関係で種々の場合に便宜がよいと云ふ理由から幹事に互選され、總ての資料を統一編輯することになった。

同じ「編後に」に記載の大正14年（1925）8月19日第一回委員会時の小坂の肩書きは、青年団副団長となっている¹⁰⁹。また、同書記載の震災時の青年団役員名簿では幹事となっているので¹¹⁰、この2年の間に副団長に就任したと思われるが、「私は青年團を代表する者」と自ら述べているので、四十代以上の年配者である団長に代わり、実務を担う気概を感じると共に、この時点で、実質的に青年団を取り仕切る立場にいた事が分かる。その上で、「一方役場に勤務する

関係で種々の場合に便宜がよい」という小坂を取り巻く状況、且つ、鎌倉町在郷軍人分会など三団体との距離が近く震災時の活動経験がある点も評価されての選定と思われる。

但し、編纂作業は中々困難を極めたようで、「尠なからざる日數を費し」、遂には、

他の委員に對しては濟まないが、一つ委員を離れて獨力完成せしめたいと考へ、大正十五年晩秋の頃より自分の體驗を基礎にして、勇敢に筆を執った。

という状況となり、特に昭和年代になってからは、ほぼ一人で編纂作業を行った様である。この「自分の體驗を基礎にして」執筆にあられたという事実からも、この任は小坂が最適であった。

この書の中で、小坂は被災した鎌倉の史蹟について次のように述べている¹¹¹。

震災後本町所在の名勝舊蹟中特長あるものに對して、史蹟名勝天然記念物保存法を適用される事になつたが、之が調査に當り世の識者は何れも該法適用の遲きを難じ、且つ個々別々に指定するの煩を避け、寧ろ「史蹟名勝鎌倉」の總括的指定をなすことの妥當なるを稱せられた。かほどまでに重きを以て稱せらるゝ本町の名勝舊蹟も、前述社寺の被害と共に、尠なからざる損害を蒙り、中には復舊の望なきものもあるに至つた。

[中略]

災後の混亂に乘じ心なき者のためにその境域を侵害蹂躪され、之が保存上に支障を及ぼすものあるに至つたのは甚だ遺憾である。

小坂は、近代以前からの鎌倉の住人の家に生まれている。鎌倉町大町「八雲神社」¹¹²の代々の宮司「小坂家」で、彼は神主の肩書きも持っていた。その八雲神社も被災し、「社殿倒潰、神輿庫半潰、裏山崩潰」の被害を出している。そして、彼は、震災の2年前から青年団幹部として指

導標建碑に携わっていたが、震災での被災、震災誌執筆のための被害調査により、鎌倉の史蹟に対する愛着が芽生えると共に、見識も大いに深め、史蹟指導標に対する思いを新たにしたいのではないだろうか。その思いをさらに理解するうえで重要な小坂の寄稿文について、次節で取り上げ、論じていきたい。

第2節 小坂藤若「郷土を愛するが爲に」から見える史蹟指導標建碑活動

大正15年(1926)、31歳の小坂藤若は鎌倉町主事となり、また鎌倉町青年団副団長となっていた。この年は震災の3年後にあたり、前節で述べたように、小坂が『鎌倉震災誌』の編纂に携わっていた時期であった。また幹事として、史蹟指導標建碑に関わるようになって5年が経過しており、まさに、副団長として建碑の中心で活動していた時期でもある。そして小坂は、鎌倉右門社から発行された『鎌倉』に「郷土を愛するが爲に」¹¹³と題する4頁にわたる史蹟指導標建碑についての文章を寄稿する。

小坂は、この文章の中で、まず、青年団が史蹟指導標を建碑に至った目的について次の様に詳細に記している。

本團は斯る信念の下に、「郷土を愛するが爲に」郷土発展の上に如何にして貢献すべきかと云ふ問題を、深く深く考慮致して居ります。即ち遺された史蹟と、自然に恵まれた風物と、地の利と、かうした得難い特徴を有する鎌倉が、遊覧地住宅地及至保養地として、更により以上美しい鎌倉、より以上住みよい鎌倉を建設するには、如何なる考慮を用ひ、如何なる手段を講ずべきかと云う問題に直面して、常に煩悶しつゝ之が事業化―具體化の欲求に燃えてゐるのであります。

然して斯る欲求のあらはれの一部分として、舊蹟保存指導標の建設や、皇太子殿下御成婚記念植樹や、海水浴場の宣傳や、松並木の掃除等幾多の諸事業を數へ擧げることが出来るのであります。

内容を整理すると、『鎌倉を自らの「郷土」と認識したうえで、第一に「郷土を愛するが爲に」＝郷土愛の具体化、第二に「郷土発展の上に如何にして貢献すべきか」、これらを目的とする事業の具体化を考え、その一つとして、鎌倉の「得難い特徴」の一つとして「遺された史蹟」

に着目し史蹟指導標を建設した』と言っている。つまり、青年団は史蹟を鎌倉の特徴として重要視し、団の事業に取り入れた訳である。

実は、大正当時の青年会は、実業の事業を営む団体が多かった。その経緯は、近世の若者組という青年組織が村落の共有地を経営し、その事業が明治以後、青年会、青年団へと継承されたためであるが、ここで、特に継承事業を持たない鎌倉町青年会は、他の青年会の如く会の象徴たるべき事業を模索し、「常に煩悶しつゝ之が事業化―具體化の欲求に燃えて」いたのではないだろうか。そこに鎌倉同人会が発会し、史蹟保護の活動を始めたことで、「遺された史蹟」という「得難い特徴を有する鎌倉」を発見したのである。

しかし、この時すでに鎌倉は「遊覧地住宅地及至保養地」として「近代鎌倉」に塗り替えられてしまっていた。そこで、「遺された史蹟」を通して「鎌倉」の歴史を顕彰するには「如何なる手段を講ずべきか」を考えた先で行き着いた解答が、史蹟指導標の建碑であったとすることができる。こうして、郷土愛の具体化と、郷土鎌倉の発展を目的として、史蹟指導標は生み出されたのである。

小坂は、本書の中で、「郷土愛」について以下の様に記している。

郷土をなつかしむ心

郷土を誇る心

そうした心の具體化によつて、郷土を美化し、之を宣傳せんとする努力が生れ出づるのであります。人各々が自らの郷土発展の爲に公共的努力を捧ぐると云ふ愛郷的觀念の發露は、延いては愛國的有意義のものとなるのであります。

彼は、手記の中で、建碑について「青年会の唯一無二の事業」¹¹⁴、「青年団唯一の大事業」¹¹⁵と表現している。つまり、鎌倉町青年団は、他に同規模の実業的事業を行っていなかったこととなるが、「ともすれば本團があまりに事業本意であつて、團本來の目的たる精神修養を閑却すると云ふ批難を受ける」¹¹⁶との記述から、史蹟指導標の建碑が活動の中心となっている鎌倉町青

年団自体に批判的な町民もいたことが分かる。ここで小坂は、「愛郷的觀念の發露は、延いては愛國的有意義のものとなるのであります。」と記す。つまり、愛郷心を育むことは愛国心の發露に繋がるものと捉え、建碑事業は「徒勞にあらざること」であるとして反論している。

くわえて指導標の役割について、

本團に於ても史蹟保存を私達鎌倉人の爲さざるべからざる一大事業として大正六年以來舊蹟保存指導標を繼續建設致してをります。然しながら一般的には唯概念的必要を叫ぶにとどまり、實際的に保存事業の徹底を期すると云ふ觀念には至つて乏しい様であります。故に私達は自らの事業に勩精すると同時に所謂鎌倉人の愛郷的覺醒を希望してやまぬのであります。

と述べ、「舊蹟の所在を明確にし、併せて探訪者の利便を圖つてゐる」¹¹⁷と共に、「鎌倉人の愛郷的覺醒」を促す役割を持っているとしている。

つまり、石碑建立により、その土地の史蹟としての意味を確定させ、來訪者を指し導く役割を担わせると共に、ただ必要性を叫ぶだけで、実際に保存事業に励む事のない町民達の意識を変えさせようとしている。ここに、代々の鎌倉の名家に生まれた小坂と、新たに移住してきた町民との「郷土愛」に対する温度差を感じることができる。そして、この温度差は、明治以來変貌を遂げてきた鎌倉のアイデンティティ構築の困難さをも浮き彫りにしていると言える。しかし、小坂は、指導標建立によって郷土愛を具体化することで、その困難さを覆し、鎌倉のアイデンティティとして意識させようとしたのである。

第3節 小坂退団後の青年団と史蹟指導標建碑のその後

小坂は、昭和6年（1931）4月、一旦町役場を退職し¹¹⁸、翌年戸塚町役場に転職した¹¹⁹。青年団活動との関わりでみるならば、昭和10年（1935）、小坂が40歳を迎えて青年団退団の年齢となるまで、主立った活動実績が認められず、団長なども務めていないため、恐らく町役場を一旦退職したあたりで、鎌倉町青年団の運営から身を引いたものと推察される¹²⁰。その後、小坂は、昭和13年（1938）鎌倉町に復帰、昭和34年（1959）助役退任まで市職員の職を全うした¹²¹。

小坂が抜けた後の鎌倉町青年団は、昭和15年（1940）鎌倉町と腰越町が合併し鎌倉市が誕生すると、これに合わせて鎌倉市青年団に改名された。この鎌倉市青年団が昭和16年に発行した『鎌倉』¹²²には、鎌倉の史蹟を史蹟指導標の碑文と共に紹介する記事があり、それまでに建碑された史蹟指導標がすべて掲載されている。この記事が、史蹟指導標の正確な建碑数を示した唯一の「同時代史料」であり、現存する史蹟指導標を評価する上で重要な史料といえる¹²³。

その後、鎌倉市青年団は昭和16年（1941）鎌倉市壮年団となる。その経緯を記す史料は残されていないが、冊子『鎌倉』の発行団体をみることで、それらの変化をみてとることが可能である。第一版は昭和16年（1941）3月に鎌倉市青年団が発行、第二版¹²⁴は、同年8月に鎌倉市壮年団により再版された。その「再版の辞」¹²⁵では、鎌倉市青年団は解散したこと、後を承けて鎌倉市壮年団が「新しく誕生した」ことが記されている。これは、同年1月に大日本青年団が解散し大日本青少年団が結成された動き¹²⁶に呼応したものと考えられ、両団とも団長が同じ蔵並長勝である点からも、26歳から40歳までの特別団員が分離独立したと考えるのが妥当と思われる¹²⁷。こうして鎌倉町青年会から続いた鎌倉における青年団体の流れは途切れ、史蹟指導標の建碑も一旦終了することとなったと推測される^{128 129 130}。

戦後は、新たに鎌倉友青会ができ、昭和27年（1952）11月に『鎌倉』第三版¹³¹が刊行される。そして昭和32年（1957）1月には第四版¹³²が刊行された。この鎌倉友青会は、『鎌倉』第三版の「緒言」で「旧鎌倉青年団同志の集り」と述べているように¹³³、青年団OBが戦後に

組織した団体で、会長は最後の青年団長蔵並長勝が務めている。蔵並は、戦後、鎌倉市議会議員を4期務め、第6・10・16代市議会議長となった¹³⁴。つまり、議員活動と並行して友青会の活動を行ったものと推測され、昭和31年（1956）3月には3基の史蹟指導標を新たに建碑する。それが、「日蓮上人祈雨旧跡」、「洲崎古戦場」、「玉縄城址」の3基である（表1）。

その翌年、昭和32年1月に発行された『鎌倉 改訂四版』の中で、「史蹟指導標」を紹介した「史蹟指導標碑文集」にはこの3基が追加され、「日蓮上人祈雨旧跡」の写真と共に以下の文章が掲載されている¹³⁵。

写真は昭和三十一年春、鎌倉友青会が建設した三基の史蹟指導標の一つ、腰越田辺池畔に建てた日蓮上人祈雨旧蹟の碑である。この三基を加えて計七十七基の指導標が各史蹟に立っている。友青会は更に全市域に残る旧址名蹟の顕彰に努力することを計画している。

すなわち、青年団長に引き続き友青会の会長を務めた蔵並は、戦時中に途絶えた指導標建碑活動の復活を図った。まさにこの3基により建碑活動を再開するとともに、更に建碑活動の推進を図る計画であったことも分かる。

なお友青会の建碑活動は、市から表彰を受けており、市政において一定の認知は受けていたと思われる¹³⁶。これは、他にも友青会会員で市政に関わっていた者が多数いたことも影響したのではないだろうか¹³⁷。しかし、昭和38年（1963）に蔵並が59歳で死去すると友青会の活動は停滞し、その後の建碑は残念ながら実現することはなかった¹³⁸。こうして、史蹟指導標の建碑活動は、80基をもって終了したのである。

おわりに

ここまで、史蹟指導標について、小坂藤若の著作から、戦前の青年団員が、どのような手順・目的で史蹟指導標を建立するに至ったのか、その経緯を明らかにしてきた。鎌倉町青年会は行政の支援の下に誕生したが、別荘族の組織である鎌倉同人会からの働きかけもあり、鎌倉の郷土愛を具体化するため、つまり、鎌倉のアイデンティティを誰にでも指し導く手段として史蹟指導標を建立し、鎌倉の発展に寄与しようとした。そして、鎌倉町青年団に脱皮し、行政からの財政的支援を受けつつ、自らその具体化のために20年に渡り継続する事業へと発展させたのである。

この郷土愛の具体化について、小坂に代表される近代鎌倉の青年団員達は、鎌倉の歴史を顕彰することを通して、自らのアイデンティティとして意識しようとした訳だが、とくに彼らが、埋もれた中世の鎌倉に焦点をあてて、その歴史顕彰に動いたことは選定された史蹟から理解することができる。この点は別稿を以て論じる予定であるが、鎌倉の青年団員は、なぜ近代鎌倉に鎌倉のアイデンティティ＝中世鎌倉という等式を再発見し、史蹟指導標を建碑し、顕彰したのか、その問いに答えるためには、中世以来の鎌倉の歴史、特に近世以後の鎌倉における歴史・史蹟顕彰の歩みについて、さらに検討を深めていかねばならない。

本稿では、史蹟指導標の建立過程を詳細に明らかにしたが、今後の課題としては、中世鎌倉をなぜアイデンティティとして意識し、史蹟指導標建碑という郷土愛を具体化する手段に用いたのかを明らかにしなければならない。また、小坂は、「愛郷的観念の發露は、延いては愛國的有意義のものとなる」と述べている。近代の史蹟顕彰論と郷土愛との関係性については、郷土愛と愛国心の関係性を論じた高木博志¹³⁹や近代の郷土史論を収めた由谷裕哉・時枝努¹⁴⁰、郷土教育論の中で郷土愛を述べた伊藤純郎¹⁴¹など近代日本の郷土論の中での議論がある。これらの議論を踏まえて、史蹟指導標の立ち位置についても、別稿で論じたい。

また、史蹟指導標建碑の契機となった鎌倉同人会の史蹟顕彰についても、その背景として伯爵陸奥廣吉の働きかけがあった訳だが、この様な西洋渡航歴のある人物を介しての史蹟保護の浸透についても論じることとしたい。

なお直近の課題としては、本稿においても課題として残った、何故その場所に建碑したのか、その場所＝史蹟の創出に遡り、特に近世の地誌『新編鎌倉志』¹⁴²との関連性について、重点的に取り組みたい。また史蹟指導標建碑事業を「唯一無二の事業」とした鎌倉町青年団の特異性を他の青年団事例と比較し、検討をくわえることで、近代日本の史蹟顕彰論における史蹟指導標の資料的価値について、さらに理解を深めていきたい。

以上

謝辞

小坂藤若ご令孫の小坂周防氏には、小坂藤若著作物の本稿掲載について、快くご了承をいただきました。ここに深く御礼申し上げます。

注

- 1 本論では、「史蹟」表記を標準とし、戦後の文化財保護法制定以降の対象を扱う場合「史跡」の表記とする。
- 2 鎌倉市市史編さん委員会『鎌倉市史 近代通史編』吉川弘文館、1994年、p. 433。
- 3 小坂藤若『随筆 あとの鴉』1970年、pp. 197～200。

小坂藤若（1895～1979）

小坂藤若は、明治28年（1895）鎌倉町大町1195番地において、父多満喜、母エイの長男として出生した。小坂家は、代々八雲神社の神職を継承してきた家柄で、小坂自身も当時存命の祖父と同じ名前を名付けられ、神職の継承を当然のこととして育てられた。ここで、小坂が、近代以前からの鎌倉の住人の家に生まれた事に言及しておきたい。

八雲神社は、鎌倉開府以前より鎮座した非常に歴史の古い神社で、新羅三郎義光が京都の祇園社を勧進したという。その神主家として小坂家があり、系図は伝わっていないが江戸時代以降の関連を示す文書などが残っている。つまり、小坂家は、古くから代々八雲神社を守ってきた家であったことが分かる。この八雲神社は、中世・近世を通じ祇園社（＝八雲神社）の祭礼が継続していた事実から、幕府滅亡や、康正元年（1455）の鎌倉公方足利成氏の古河への逃亡により、鎌倉が武家の主を失ない急激に衰退し、社寺の多くが荒廃した後も、ある程度の社格を保っていたことが窺える。これは、慶長9年（1604）徳川家康から朱印地五貫文の寄進を受け、江戸時代を通じて変わらなかった経緯からも明らかである。この事から、八雲神社・小坂家は共に、明治以前から鎌倉に住む旧来の住民にとって、ある程度認知された存在であったと考えることができる。つまり、小坂藤若は、新たに鎌倉に住み着いた別荘族ではなく、旧来からの鎌倉在住者、且つ、その代表的性格を有する家の出身者であるという事になる。（八雲神社記述参考文献：吉川弘文館編集部『鎌倉古社寺辞典』吉川弘文館、2011年、pp. 63～64。）

鎌倉町青年会が発会した3年後の大正3年（1914）9月1日、19歳となった小坂は、当時唯一の神職養成機関であった東京皇典講究所神職養成部教習科に入学、約1年間に渡る東京での下宿生活を経て、大正4年（1915）6月30日に卒業、20歳で神職の資格を取得した。そして、卒業前月7日の徴兵検査に甲種合格、その年の12月11日、徴兵により近衛騎兵連隊に入隊し、約2年に渡る軍隊生活を送る。大正6年（1917）11月26日、22歳の小坂は、帰休除隊を命じられ鎌倉に帰郷した。実家に戻った小坂であったが、当時は、父多満喜が宮司として健在であり、宮司を手伝うほどの仕事量もなかった。しかし、経済的には必ずしも恵まれてはいなかったため、「別な社会への就職を考え」大正7年（1918）4月16日に、鎌倉町役場の臨時雇に採用、12月に有給吏員となり、書記に任じられた。ここから、以後30年以上に及ぶ公務員と宮司の二足のわらじの生活が始まるのである。

- 4 小坂藤若前掲書（3）pp. 201～202。

昭和 45 年（1970）11 月 20 日発行。

市役所退職時（昭和 34 年（1959）5 月）に「身辺を整理し、永年、溜め残した公私の文書類を概ね廃棄又は焼却した。最後に筐底から出てきた日記、ノート二十冊」が出てきたが、「懐旧の念しきりに沸いてなつかしく、こればかりは残しておこうと決意、それから長い時間をかけて読了した。」「これは私の前半生の記録である。これを一冊の単行本にとりまとめ、親戚知己、或いは旧職場の同僚や先輩の方々に読んでもらい、子孫にも伝えることができたなら、幸甚この上もないと考え、それから一定の原稿用紙に転写して、機に至るのを待った。」「昨夏、妻の一周忌霊祭（みたままつり）を済ませたについて、多少心のやすらぎを取り戻したので、初志貫くべしと思い返し、茲に本書刊行の運びをつけた次第である。」

ご令孫の小坂周防宮司によると、刊行後、資料は焼却し、本書以外は何も残っていないとのこと。（2020 年 8 月 25 日電話にて）

- 5 小坂藤若「郷土を愛するが爲に」福光四郎編『鎌倉 大正十五年四月創刊號』鎌倉右門社、1926 年、p. 36。

- 6 鎌倉市市史編さん委員会前掲書（2） p. 433。

「鎌倉友青会は青年団OBによる組織」と記述がある。従って、『鎌倉 改訂四版』および所収の「鎌倉史蹟指導標配置圖」は、史蹟指導標建碑組織による公式史料と言える。

- 7 鎌倉友青会『鎌倉 改訂四版』鎌倉友青会、1957 年。

- 8 沢寿郎『鎌倉同人会五十年史』社団法人鎌倉同人会、1965 年、p. 49。／pp. 87～88。

- 9 稲葉一彦『「鎌倉の碑」めぐり』表現社、1982 年。巻頭頁、「「鎌倉の碑」所在一覧」。

鎌倉友青会前掲書（7） pp. 90～91。「鎌倉史蹟指導標配置圖」。

沢寿郎前掲書、p. 49。／pp. 87～88。

以上 3 点を使用し、2018 年 4 月から 12 月まで実地調査を行い、史蹟指導標の所在位置、碑文の現状確認を行った。

- 10 稲葉一彦前掲書。

- 11 私のかまくら編集室編「カルチャー散策 鎌倉いしぶみ紀行」（全 17 回）『私のかまくら』アルファ、1995 年 1 月号～1996 年 5 月号。

私のかまくら編集室編「歩いて発見！ 碑文をたどる歴史散策」（全 21 回）『私のかまくら』アルファ、2004 年 2 月号～2005 年 10 月号。

- 12 鎌倉市市史編さん委員会前掲書（2）前掲書 p. 433。

- 13 青木佑太・横内憲久・岡田智秀・押田佳子・瀬畑尚紘「歴史的変遷からみた鎌倉における徒歩観光を促す観光まちづくりに関する研究—（その 2）全 23 本の「通り」に着目して—」

『平成 23 年度日本大学理工学部学術講演会論文集』、日本大学、2011 年、pp. 391～392。

- 14 羽賀祥二『史蹟論 —19 世紀日本の地域社会と歴史意識—』名古屋大学出版会、1998 年。

- 15 高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店、2006 年。

- 16 矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館、2006年。
- 17 田中克佳・船田元「戦前日本青年団史研究」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要:社会学心理学教育学(19)』慶應義塾大学大学院社会学研究科、1979年、pp. 35～41。
- 18 佐竹智子「明治期における青年団の生成と展開」『広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部(60)』広島大学大学院教育学研究科、2011年10月、pp. 83～92。
- 19 鎌倉市市史編さん委員会前掲書(2)前掲書。
- 20 大矢悠三子「海水浴の発祥と発展」『湘南の誕生』藤沢市教育委員会、2005年、pp. 45～46。
- 21 片山伸也「近代別荘の普及に見る鎌倉の都市構造」『日本女子大学紀要 家政学部第59号』日本女子大学、2012年、p. 90。
- 22 原田香織編『鎌倉と海水浴』ゆまに書房、2009年、p. 600。／p. 603。
中心となるのが、明治32年(1899)の鎌倉御用邸の設置である
- 23 鎌倉市議会史編さん委員会『鎌倉議会史(記述編)』鎌倉市議会、1969年、p. 38。
(第1・3表)より
- 24 島本千也「湘南の別荘地化 一鵠沼地区を中心として」『湘南の誕生』藤沢市教育委員会、2005年、p. 63。
- 25 片山伸也「近代別荘の普及に見る鎌倉の都市構造」『日本女子大学紀要 家政学部第59号』日本女子大学、2012年、p. 95。
別荘地の形成は、中世以来住民から忌避されてきた海浜部に初めて光を当て、それまでの鎌倉都市形成史の流れとは全く繋がらない新しい「まちづくり」が行われた。
- 26 鎌倉市市史編さん委員会『鎌倉市史 近代史料編第二』吉川弘文館、1990年、pp. 300～301。

○鎌倉青年会発会式

『横浜貿易新報』明治四十四年三月十四日より転載

明治44年(1911)2月26日の集会にて組織化が決定し、3月12日に「鎌倉青年会発会式」が挙行された。支部は、十二所・浄明寺・二階堂・西御門・雪ノ下・扇ヶ谷・小町・大町・材木座・由比ヶ浜・長谷・坂ノ下・極楽寺の13ヶ所である。

- 27 佐藤守『近代日本青年集団史研究』御茶の水書房、1970年、pp. 3～6。
- 28 佐竹智子前掲書 p. 84。／p. 87。

青年会設立の最初の契機となったのが、明治21年(1888)に発布された町村制の開始である。明治政府は町村制により新国家体制下に市町村を明確に位置付けたため、江戸時代から存在した若者組等の組織は、従来の村落ではなく行政組織としての町村レベルでの再編成、再組織化が進むこととなり、日本に町村青年会が誕生するに至る。次の契機は、明治22年

(1889)の徴兵令改正である。これは、全青年に徴兵義務を拡大するもので、そのために徴兵のための補習教育の場が必要となり、青年会が組織された。但し、これらはあくまで町村内で主体的に起きた動きであった。

- ²⁹ 及川清秀「地方における青年会政策とその動向について ―神奈川県事例から」『地方史研究 51(1)』地方史研究協議会、2001年、pp. 25～26。

この新しく町村に生まれた青年会という組織に対して国が関心を持つのは、日露戦争直後の明治38年(1905)のことである。この年9月の内務省通牒・文部省通牒により、青年団体の設置が国によって奨励され、ここで初めて国家政策に上ることとなった。明治41年(1908)に煥発された戊申詔書では、帝国主義列強に伍して発展するために全国民が協同一致の体制をもって協力することが求められたが、その手段として青年会が注目を浴びる事となった。まさにこの戊申詔書が青年会の増加の契機となったのである。

戊申詔書が全国の青年たちに与えた影響は大きく、地方で発達しつつあった青年団体は、その精神的支柱を正当化する根拠を国家によって与えられ、青年団体は戊申詔書の煥発を契機として全国的に増加の一途をたどった。

- ³⁰ 鎌倉市教育研究所『鎌倉教育史』鎌倉市教育委員会、1974年、p. 134。

- ³¹ 鎌倉市教育研究所前掲書 p. 132。

教科・教授法の研究、教員の待遇改善、市町村教育費国庫補助、学制改革など教育に関するさまざまな問題について組織的に活動する

- ³² 鎌倉市教育研究所前掲書 p. 133。

- ³³ 鎌倉市教育研究所前掲書 pp. 244～245。

鎌倉郡教育会は、明治四十三年度の事業計画書に次のように書いている。

町村青年会奨励補助

教育勅語戊申詔書ノ御趣旨ヲ遵守シ青年者智徳ノ修養身体ノ鍛錬
風紀ノ改善実業ノ発達勤儉力行ヲ以テ共同自治ノ精神ヲ養フハ
タメニ其ノ団体ヲ組織シ常ニ国勢ノ進運ニ後レサラント期スル是
レ実ニ緊要ノ事ニシテ苟ニ青年自身ノ為メノミニアラスシテ延テ
社会風教地方自治ニ貢献スル処尠ナラサルヤ固ヨリ当然ノコト
トス依テ此等青年会ヲ補助シ良好ナル発達ヲ遂ゲシメントス
そして、明治四十三年度には、郡内の町村青年会補助として三百

二十円を支出している。

³⁴ 宮坂広作『近代日本社会教育政策史』国土社、pp. 65～66／pp. 134～142。

³⁵ 鎌倉市市史編さん委員会前掲書（26） pp. 299～302。（『横浜貿易新報』より転載）

以下、発会日を順に見ていくと、小坂村は「養徳青年会」を明治43年（1910）2月27日に、深沢村は「深沢村青年会」を明治43年（1910）7月10日に、玉縄村は「玉縄青年会」を明治43年（1910）9月24日に各々発会している。因みに、この「玉縄青年会」では村在住の15歳以上35歳以下の男子と規定されていた。腰越津村は発会の時期が不明だが、明治44年（1911）8月15日に腰越津村青年会総会を開催していることから、この年より前にすでに発会していた事となる。なお、この時の腰越津村総会は帝国在郷軍人会鎌倉郡腰越津村分会による忠魂祭との併催であった。これは、青年会と在郷軍人会との距離の近さが読み取れる。

³⁶ 片山伸也前掲書 pp. 91～92。

表2 鎌倉の別荘所在地内訳

（大橋良平『現在の鎌倉』通友社、1913年、別荘一覧を元に集計）

常住している人々（「常住の別荘」という表現が度々使われた）の中には海軍軍人が多くみられ、伊東祐亨や上村彦之丞など大将以上の高級軍人が居を構えた。特に小町や扇ヶ谷は海軍町の様相を呈していた。明治45年（1912）の別荘所有者のうち海軍関係者は70名にのぼる。

³⁷ 鎌倉市市史編さん委員会前掲書（2） p. 262。

³⁸ 島本千也前掲書 p. 63。

柴山海軍大将を幹事長に設立。この組織は、あくまで別荘族の親睦融和が目的であった

³⁹ 一般社団法人鎌倉同人会編『鎌倉同人会100年史』冬花社、2015年、p. 16。

勝見正成は、明治20年（1887）に鎌倉海浜院に医師として着任、その後鎌倉で開業し、初代鎌倉郡医師会長をつとめるなど近代医療を鎌倉に根付かせた人物であった。

⁴⁰ 飯塚陽生 天野光一 押田佳子「鎌倉同人会の活動にみる近代鎌倉のまちづくりに関する基礎的研究」『土木史研究講演集32』土木学会、2012年6月、pp. 251～252。

勝見は、急速な別荘開発に伴う景観の破壊や、粗悪な造りで不便なインフラなどの当時鎌倉で起きていた都市問題を解決するため、陸奥宗光の長男で病弱のため外交官を辞し鎌倉に移り住んだ伯爵陸奥広吉や、元神奈川県知事の大島久満次に相談、結果、その3人が中心となり、他の鎌倉倶楽部会員など鎌倉在住の有力者も加わり、結成に至った。この同人会の目的は、今で言う「まちづくり」に当たり、まさに現代において「まちづくり」に関わるNPO法人の先駆けの様な市民団体ということができる。

⁴¹ 一般社団法人鎌倉同人会編前掲書 pp. 23～24。

42 鎌倉市市史編さん委員会前掲書 (2) pp. 262～263。

43 一般社団法人鎌倉同人会編前掲書 p. 80。

44 浪川幹夫「近代鎌倉の文化遺産保護と宝物館設立事情」『國學院大學博物館學紀要 40』國學院大學博物館学研究室、2015 年、p. 6。／p. 13。

鎌倉保勝会は、関東大震災後同人会の取り組む鎌倉国宝館建設のためにその全財産を寄付し、大正 15 年 (1926) に解散することとなる。

大正 15 年 (1926) には同館建設に際し「鎌倉保勝會」から全財産として 3,500 円寄附があった。

45 一般社団法人鎌倉同人会編前掲書 pp. 49～50。

46 『大日本地誌体系(二十一) 新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』雄山閣、1958 年、p. 14。

近世の地誌『新編鎌倉志』卷之一「○筋替橋」に「鎌倉十橋」についての記述がある。

鎌倉の十橋と云ふは、琵琶橋・筋替橋・歌橋・勝橋・裁許橋・針磨橋・夷堂橋・逆川橋・亂橋・十王堂橋なり

／P. 80

また『新編鎌倉志』卷之四「○鐵井」に「鎌倉十井」についての記述がある。

鎌倉の十井あり。棟立井・瓶井・甘露井・鐵井・泉井・扇井・底脱井・星月夜井・石井・六角井、此を鎌倉の十井と云ふ。

鎌倉保勝会建立の「鎌倉十井」「鎌倉十橋」碑については、先行研究が存在しない。史蹟指導標と同じく研究の進展が課題である。

47 一般社団法人鎌倉同人会編前掲書 p. 97。

「鎌倉同人会」が行った活動の中で、非常に先見性が感じられる活動が、大正 8 年 (1919) に起きた由比ガ浜の海浜埋め立てによるホテル建設計画に対しての反対運動への参画であった。これは浅野総一郎、安田善次郎という財界の大物が関わった大開発計画であったが、海岸の埋め立ては風致を損ね、且つ、漁民の生活を脅かすと反対運動を展開し、県知事への陳情や陸奥による浅野への直接の説得により、計画は取りやめとなった。後に戦後、鎌倉は「御谷騒動」という大開発反対運動を起こす事となるのであるが、その下地として、戦前に開発反対運動の歴史を持っていたという事実は、重要な要素として認識しておくべきであろう。

48 一般社団法人鎌倉同人会編前掲書 p. 22。

- 49 寺門徳太郎「序」 沢寿郎『鎌倉同人会五十年史』 社団法人鎌倉同人会、1965 年、巻頭頁。

序

大正四年（一九一五）一月陸奥広吉伯の主唱により創立せられた社団法人鎌倉同人会は本年で丁度満五十年になる。当時の陸奥伯は外交官で世界を広く識っており、其上夫人が名門の英人であったから、其識見は群を抜いておった。

<中略>

昭和四十年（一九六五年）三月

七代目理事長寺門徳太郎

同人会が史蹟保護に積極的に取り組んだ理由の一つに、同人会発起人の一人、陸奥広吉の存在は大きかった。陸奥は外交官で世界を広く識り、また夫人が名門のイギリス人であり、当時の同人会内部においても、識見は群を抜いていたという。従って、史蹟の保護は特に陸奥の意見の反映が大きいと思われる。なお、史蹟指導標建碑に影響を与えた鎌倉同人会の歴史顕彰活動については、別稿にて論じることとしたい。

- 50 一般社団法人鎌倉同人会編前掲書 pp. 38～40。

「段葛」は、養和 2 年（1182）に源頼朝が妻政子の安産を祈願し作らせたと伝わるが、横須賀線により一部が寸断され、残った部分も非常に荒れ果てていた。そこで土塁を整備の上、桜とつつじを植樹し、以後、近年再整備されるまで百年余りに渡り親しまれた見事な桜並木の基礎を作ら上げた。

- 51 一般社団法人鎌倉同人会編前掲書 pp. 41～48。

若宮大路の松並木の保護、保存にも尽力、老松の手入れや風害にあった松の復旧作業などを行った。残念ながらこの松並木は関東大震災により多くを失うが、現在でも数本が健在である。

- 52 沢寿郎前掲書 p. 38。

大正六年

社寺・古文書の調査蒐集

また、これも、完成は翌年になったのだが、鎌倉内の社寺の宝物をことごとく調査して、書籍にまとめて置こうとの議が、陸奥氏、本多氏あたりから起り、早速調査にかかることに決し、その編纂は本多正憲氏が担当することとなった。

また、これと併行して、鎌倉の古文書を蒐集して置くことも提唱され、これは帝国大学

史料編纂係に依頼して、同所々蔵の古文書で鎌倉に関係あるものを影写してもらうことになった。

／p. 35。

本多正憲氏について

会員の本多正憲子爵は、歴史、美術等に造詣深く、史蹟保存等については常に有益な意見を開陳し、極めて熱心なので、委員会で、同氏を委員会顧問に推薦し、承諾を得た。

53 鎌倉市議会史編さん委員会前掲書（23） p. 49。

54 鎌倉市議会史編さん委員会『鎌倉議会史（資料編）』鎌倉市議会、1969年、p. 646。

55 鎌倉市議会史編さん委員会前掲書（54） p. 648。

大正5（1916）年

[中略]

7.20 県へ旧蹟保存費補助願提出（6.

2.9、38円交付）。

28 県へ旧蹟保存費補助願提出（6.

2.9、80円交付）。

56 鎌倉市議会史編さん委員会前掲書（54） p. 652。

大正8（1919）年

5.31 青年会が旧蹟保存費補助願を町会に提出（11.25町会150円交付決定）。

57 鎌倉市議会史編さん委員会前掲書（54） pp. 649～650。

大正6（1917）年

[中略]

7.16 県へ旧蹟保存費補助願（6.12.

26、24円交付）。

58 沢寿郎前掲書 p. 40。

59 沢寿郎前掲書 p. 41。

60 『大日本地誌体系(二十一) 新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』雄山閣、1958年、p. 100。

「飢渴畠」は『新編鎌倉志卷之五』に記載され、「刑罰の所」と記されている地で、六地藏と芭蕉の句碑があった。

61 沢寿郎前掲書 p. 18。

62 沢寿郎前掲書 pp. 44～45。

完成後、会はこれを町に寄附し、これに対し県からは木杯が賞として贈られた。

63 沢寿郎前掲書 p. 49。

64 本論においては、同人会建立の顕彰碑「盛久頸座」について、史蹟指導標と形状が甚だ異なる点、また、後に青年団が同地に史蹟指導標を建碑していることから、この同人会碑を正統な史蹟指導標の1つとは認めていないと考えられるため、史蹟指導標とは見なさない事とする。

65 小坂藤若前掲書(3) p. 141。

「日誌 大正十年五月十六日」より

66 鎌倉市議会史編さん委員会前掲書(54) pp. 652。

67 鎌倉市市史編さん委員会前掲書(2) p. 433。

68 鎌倉市教育研究所前掲書 p. 245。

69 小坂藤若前掲書(5)。

70 小坂藤若前掲書(5) p. 36。

71 鎌倉市青年団『鎌倉』鎌倉市青年団、1941年。

72 鎌倉市青年団長 藏並長勝「緒言」鎌倉市青年団前掲書 巻頭頁。

73 鎌倉町役場編『指導標碑文集』鎌倉町役場、1940年、鎌倉市深沢図書館蔵。

鎌倉市青年団長藏並長勝「碑表建設願」(史料1～3) (写3)「碑表配置図」(写5)「承諾書」(写6) (義経宿陣之趾・朝夷奈切通・鐵井の3箇所分)は、『指導標碑文集』(写4)の巻末に添付されている。

74 鎌倉町役場編『鎌倉震災誌』鎌倉町、1930年。

75 鎌倉町役場編前掲書(74) pp. 315～319。

76 鎌倉市市史編さん委員会前掲書(2) pp. 431～434。

77 「碑表建設願」に記された尺寸と同寸法が記載されている。

78 田中克佳・船田元前掲書 p. 38。

79 鎌倉郡聯合青年團『團報 創刊號』1931 年、p. 6。（神奈川県立図書館蔵）

鎌倉郡聯合青年團狀況

一、沿革ノ概要

本聯合青年團ハ大正七年三月二十八日戸塚小學校ニ於テ郡内十六ヶ町村青年團員ノ大會
ヲ開催シ同時ニ本團ノ創立ヲ看タリ

80 鎌倉郡聯合青年團前掲書 pp. 77～78。

村岡村、深沢村、川口村、腰越町、鎌倉町、小坂村、玉縄村、本郷村、豊田村、大正村、
戸塚町、永野村、川上村、中川村、瀬谷村、中和田村、以上 16 町村

81 鎌倉郡聯合青年團前掲書 p. 6。

82 鎌倉郡聯合青年團前掲書 p. 7。

村岡村青年團沿革ノ概要 [中略] 大正六年九月迄ハ彼ノ三十五歳マデノ壮年ヲ
含ム不合理ナ青年會時代デアッタ、ソレガ躍二十五歳ヲ限度トスル新規約ニヨリ青年
會ノ名稱ハヨリカ強イ青年團トアラタメラレタノデアル

83 小坂藤若前掲書 (3) p. 139。

「日誌 大正十年二月二十四日」より

84 小坂藤若前掲書 (3) p. 141。

「日誌 大正十年五月十六日」より

85 鎌倉市議会史編さん委員会前掲書 (23) p. 90。

村田久吉は、青年団長退任後の昭和 3 年(1928)に普選による最初の選挙として実施された町
会議員選挙に当選しているが、本書の当選者一覧には、「28 村田久吉 地主 坂ノ下」と、
記載されている。

86 鎌倉市議会史編さん委員会前掲書 (54) p. 883。

本書の当選者一覧表には、村田の職業欄に「銀行員」との記載がある。

87 田中克佳・船田元前掲書 p. 39。

大正 9 年(1920)の内務省文部省第三次共同訓令および通牒において、青年会内部でのリー
ダー就任を容認し、自主自立の精神を尊重したために、「自治訓令」とも呼ばれた。

88 米村柳蔵編前掲書。

89 米村柳蔵編前掲書 巻頭頁。

目次より戦時色の強い項目を抜粋

- 一、銃後青年の覺悟 鎌倉町青年團長 藏並長勝 一
- 一、試練 同顧問 藤原玄通 二
- 一、躍進青年 同副團長 小坂善男 四
- 一、我等は眞の帝国臣民と成りきりませう 同元副團長 高橋竹次郎 五
- 一、我々の覺悟 長谷支部長 加藤喜八 十八
- 一、時局に對する覺悟 長谷副支部長 諏訪義行 二三
- 一、銃後に於ける青年の覺悟 小町支部 金子盈 三三
- 一、試練の嵐に耐へよ 極樂寺支部 藤倉音吉 三八

90 米村柳蔵編前掲書 pp. 54～55。

91 小坂藤若前掲書 (3) p. 141。

「日誌 大正十年五月十六日」より

92 小坂藤若前掲書 (3) p. 141。

「日誌 大正十年五月十七日」より

93 小坂藤若前掲書 (3) p. 162。

「日誌 大正十一年五月一日」より

94 沢寿郎前掲書 p. 67。

95 沢寿郎前掲書 p. 87。

おそらく、鎌倉町内であれば鎌倉町青年団が建立したと思われる。現に、腰越町と合併し鎌倉市となった翌年の昭和 16 年 (1941) に鎌倉市青年団が建碑したうちの 1 基は、腰越満福寺内に建碑された「義経宿陣之趾」であった。

96 沢寿郎前掲書 p. 135。

97 鎌倉町役場編前掲書 (74) 。

98 鎌倉市市史編さん委員会前掲書 (2) p. 322。

大正 12 年 (1923) 9 月 1 日午前 11 時 58 分発生した相模湾が震源であったため、鎌倉に甚大な被害を与えた。

99 鎌倉町役場編前掲書 (74) pp. 64～65。

100 鎌倉町役場編前掲書 (74) pp. 286～288。

101 鎌倉町役場編前掲書 (74) p. 288。

震災時の三団体の活動に対する記載がある。

當時警備の任に當った軍隊及警察官、青年團、在郷軍人分會、消防組等

／ p. 289。

震災直後より救護に警備に日夜盡瘁(尽瘁ゾンスイ)したる當町青年團、在郷軍人分會、消防組

102 沢寿郎前掲書 p. 80。

鎌倉同人会は、震災時の三団体の労に報いるために、1000 円を贈呈した。

この災害に当って、日夜全力をあげて公共のために力を尽した、在郷軍人会、青年団、消防団の三団に対し、その労に酬いるため、会は一〇〇〇円を贈って、感謝の意を表した。

103 小坂藤若前掲書 (3) pp. 187～188。

「日誌 大正十三年六月五日」より

104 田中克佳・船田元前掲書 pp. 38～39。

明治末から徴兵制との関連で在郷軍人会と青年会を連続的に捉えようとした動きがあった

105 小坂藤若前掲書 (3) p. 127。

「日誌 大正九年三月十五日」より

大正 9 年 (1920) 3 月 15 日に鎌倉町在郷軍人分会と鎌倉町青年団の連合総会への出席
／p. 140。

「日誌 大正十年三月十三日」より

大正 10 年 (1921) 3 月 13 日に鎌倉郡各町村在郷軍人分会と鎌倉郡連合青年団の連合総会への出席

106 小坂藤若前掲書 (3) p. 198。

107 鎌倉町役場編前掲書 (74) 鎌倉震災誌序 p. 2。

108 鎌倉町役場編前掲書 (74) pp. 315～316。

109 鎌倉町役場編前掲書 (74) p. 315。

以下の通り、編纂委員 7 名の記載がある。

町會議員	石橋湛山
同	相澤善三
在郷軍人分會長	中野孝一郎
消防組頭	三橋左一郎
青年團副團長	小坂藤若
鎌倉町役場書記	北村治太郎

小學校長 山口 萬

110 鎌倉町役場編前掲書 (74) p. 309。

111 鎌倉町役場編前掲書 (74) pp. 106～107。

112 吉川弘文館編集部『鎌倉古社寺辞典』吉川弘文館、2011 年、pp. 63～64。

八雲神社について、下記の記載がある。

大町一丁目一一一二に鎮座。最新は須佐之男命・稲田姫命・八王子命。

[中略] 社伝によれば、永保年間（一〇八一一八四）に新羅三郎義光が陸奥の安部貞任の鎮圧に向かう途中に鎌倉の悪疫流行を治めるために京都の祇園社を勧進したという。そのためか本社を天王・松堂祇園社・松殿山祇園天王社・祇園天王などと称することがあった。 [中略] 神主家として小坂家があり、系図は伝わっていないが江戸時代以降の関連を示す文書などが残る。慶長九年（一六〇四）徳川家康から朱印地五貫文の寄進を受け、江戸時代を通じて変わらなかった。

113 小坂藤若前掲書 (5) pp. 34～37。

114 小坂藤若前掲書 (3) p. 141。

「日誌 大正九年五月十六日」より

青年会の唯一無二の事業として、大正六年以来継続実施してきた旧蹟保存指導標の建設について協議した。

115 小坂藤若前掲書 (3) p. 162。

「日誌 大正十一年五月一日」より

青年団の唯一の大事業である旧蹟保存指導標の建設について、昨年五月決定したままのびのびになっていたものを、此の際実施しようと云うことになって、今日午前九時から村田団長以下私たち幹部一同出動した。

116 小坂藤若前掲書 (5) p. 34。

117 小坂藤若前掲書 (5) p. 36。

118 小坂藤若前掲書 (3) p. 201。

昭和 3 年（1928）小坂藤若は、父多満喜の死去により家督を相続し、八雲神社の社裳を継承した。

119 小坂藤若前掲書 (3) p. 199。

昭和 8 年 (1933) 助役に選任され、昭和 12 年 (1937) の任期満了まで務めあげる。

120 鎌倉郡聯合青年團前掲書 pp. 77～78。

「鎌倉郡聯合青年團評議員(各町村青年團長)變遷(大正十一年以降)」より、大正 10 年 (1921) 小坂が初めて青年團の役員に就任した際、日誌に記載された副団長以下の役員 7 名のうち 3 名(第 2 代山本和三郎、第 3 代関佐平次、第 5 代宮本慶次郎)が後に団長になっている。また、第 4 代団長加納義雄は、鎌倉市議会史編さん委員会前掲書 (54) p. 7 記載の歴代収入役一覧より、昭和 6 年(1931)2 月 12 日～昭和 16 年(1939)10 月 31 日まで、鎌倉町・市収入役に就任しており、小坂と同じく行政の職員であった可能性が高い。従って、小坂藤若も、一旦鎌倉町を退職しなければ、恐らく団長に推挙されていたのではないだろうか。

121 小坂藤若前掲書 (3) pp. 199～201。

昭和 13 年 (1938) 鎌倉町に復帰し、市制施行準備事務の専従となっている。戦中から戦後にかけては、市の課長職を歴任すると共に、戦後は、神奈川県神社庁の役職も兼務、更に、民生部長から昭和 32 年 (1957) には、助役に選任、昭和 34 年 (1959) 5 月 11 日、1 年半務めた助役退任と共に 63 歳で市役所を退職した。その後、10 年後の昭和 45 年 (1970) 手記『随筆 あとの鴉』を出版し、後顧の憂いを断った小坂は、昭和 54 年 (1979) 8 月 18 日に大往生を遂げる。享年 84 歳であった。

※命日は、現宮司小沢周防氏(小坂藤若ご令孫)より聞き取り。(2020 年 9 月 22 日電話にて)

122 鎌倉市青年團前掲書。

皇紀二千六百年を記念する青年団事業の一つとして、鎌倉の史蹟を「史蹟指導標」と共に紹介すると共に、鎌倉概史・考古学・美術等について専門家に解説の執筆を依頼した。(鎌倉市青年團長 藏並長勝「緒言」より)

123 本書の史蹟指導標の碑文を紹介する頁の表題は「史蹟指導標碑文集」となっており、第 2 章で取り上げた史料『指導標碑文集』をそのまま活字化したものに映る。そして、この碑文集は、戦後の出版である『鎌倉 改訂四版』まで継続して掲載された。特に第四版には、すべての指導標の位置を記した「鎌倉史蹟指導標配置圖」までも掲載されている。鎌倉を紹介する冊子の中で、敢えて自らの事績である史蹟指導標の存在を誇示するかの如く、すべての指導標の碑文を掲載した事実に、青年団の碑文に対する強い執着が見えると共に、小坂の思いの後輩達への継承が垣間見え、非常に興味深い。

124 鎌倉市壮年團『鎌倉 再版』鎌倉市壮年團、1941 年。

125 鎌倉市壮年團長 藏並長勝「再版の辭」鎌倉市壮年團前掲書 巻頭頁。

尚初版刊行者たる鎌倉市青年團の解散に伴ひ、今後本書は同團の後を承けて新しく誕生した鎌倉市壮年團によつて刊行されることゝなつた

- 126 熊谷辰二郎『大日本青年団史』日本青年館内熊谷辰二郎、1942年、附録 p. 50。／附録 p. 55。

昭和 14 年(1939)4 月に大日本連合青年団は、大日本青年団と改称、昭和 16 年(1941)1 月、大日本青少年団の結成に合わせ、大日本青年団は解散となった。

- 127 横浜市総務局市史編集室編集『横浜市史Ⅱ 第一巻(下)』横浜市、1996 年、p. 413。

壮年団は地域の中堅（主に 21 歳以上）の自主的組織で、壮年団運動は、満州事変ころから活発化し、国民精神総動員運動を通じて発展、昭和 16 年(1941)までに全国各地で 1518 の壮年団が結成された。昭和 16 年 3 月、この連合体として大日本壮年団連盟が結成された。その後、大政翼賛会は、壮年団を傘下におさめる組織作りに着手し、1942 年 1 月、大日本翼賛壮年団が結成された。

鎌倉市青年団の解散と、鎌倉市壮年団の結成は、これら壮年団の上部組織結成と、大日本青年団の解散に関連した動きと思われる。

- 128 『【久米正雄氏旧蔵史料】「鎌倉市青年団連盟結成一周年記念大会開催案内」』。(神奈川県立公文書館所蔵資料)

差出人 鎌倉市青年団連盟委員長 亀井勝利

受取人 鎌倉ペンクラブ 久米正雄

差出日付 昭和二十二年九月十日

昭和 16 年（1941）に鎌倉市青年団は解散したが、昭和 22 年（1947）に、新たに鎌倉市青年団連盟が結成されている。

- 129 「日本青年団協議会」ホームページ：協議会概要-加盟団一覧

<http://www.dan.or.jp/gaiyou/accession.html>（2018 年 11 月 8 日に閲覧）

戦後の徴兵制・軍隊の廃止によって存在意義が希薄となった青年団は、昭和 30 年代に活動停止や解散する団体が増加した。大日本連合青年団の後継組織として日本青年館を管理している日本青年団協議会の現在の加盟団体は、東京都に存在しないのを始め都市部に少ないが、逆に地方の青年団は現在も多く加盟しており、地方においては戦後も青年団組織が残存した事がみてとれる。

- 130 鎌倉市役所総務部庶務課石渡政治編『かまくら 1957』鎌倉市役所、1958 年、p. 21。

鎌倉市社会教育行政組織系統

教育委員会 — 教育長 — 社会教育課 — 社会教育係 — 青年団連盟

鎌倉の青年団は、この記録を最後に、存在の確認ができなくなる。

- 131 鎌倉友青会『鎌倉 改訂三版』鎌倉友青会、1952 年。

132 鎌倉友青会前掲書 (7) 。

133 鎌倉友青会々長 蔵並長勝「緒言」鎌倉友青会前掲書(131) 巻頭頁。

134 鎌倉タイムズ社編集部「鎌倉の現代史をさぐる 復刊一千号記念座談会(9) 81 基の史蹟指導標 同人会と青年団の事績」『旬刊 鎌倉タイムズ 1982 年 7 月 30 日 第 1015 号』鎌倉タイムズ社、p. 3。

蔵並長勝氏＝明治 36 年(一九〇三)～昭和 38 年(一九六三)蔵並工務店社長。本業のかたわら青年団活動に参加、史蹟保存旧蹟指導標建設に貢献した。昭和 13 年青年団長、のち壮年団長。

戦後市会議員四期(22～36 年)市会議長三期、商工会議所議員(建設部会)四期をつとめ市政内外に重きをなした。草間、磯部、山本(前期)時代にはその重厚は見解によって市政の“御意見番的存在”といわれた。満 59 才の惜しまれる早逝であった。

135 鎌倉友青会前掲書 (7) p. 92。

136 鎌倉友青会前掲書 (7) p. 91。

写真で二の鳥居の左下に見えるのが鎌倉町青年団が建設した史跡指導標である。旧青年団有志の組織する鎌倉友青会はこの史蹟保護顕彰の功によつて昭和三十一年秋鎌倉市から表彰されている。

137 鎌倉市議会史編さん委員会前掲書 (54) p. 8。／p. 793。／ p. 892。

本書と米村柳蔵編前掲書 p. 47 記載の「鎌倉町青年團現役員名簿」を照合すると、元青年団副団長である小坂喜男は、昭和 22 年市議会議員選挙に当選、昭和 35 年(1960)に鎌倉市消防団長に就任。元青年団書記、内田源太郎は、昭和 39 年(1964)に鎌倉市収入役に就任している。なお、この 2 名は、鎌倉友青会前掲書 (131) p. 96「鎌倉友青會々員名簿」に記載されている。

138 林茂雄『潮騒・松籟・木の香り』創造社、1997 年、p. 162。

すでに消滅している団体のOB組織のため新規会員は増加せず、会員の高齢化による活動の沈静化、会員の死亡による会員数の減少で当初 30 人いた会員は 1997 年段階で 4 人となり、現在は消滅したものと推察される。

139 高木博志「「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの」『歴史評論 659』、校倉書房、2005 年、pp. 2～18。

140 由谷裕哉・時枝努編著『郷土史と近代日本』角川学芸出版、2010 年。

141 伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』思文閣出版、2008 年。

¹⁴² 河井恒久友水 纂述、松村清之伯胤 考訂、力石忠一叔貫 参補『新編鎌倉志』洛陽:柳枝軒、
1685 年(貞享 2)。

水戸藩主徳川光圀の指示により編纂された鎌倉の地誌、全八巻

【史料】

- (史料 1) 「碑表建設願 義経宿陣之趾」『指導標碑文集』鎌倉町役場、添付 鎌倉市深沢図書館蔵
(史料 2) 「碑表建設願 朝夷奈切通」『指導標碑文集』鎌倉町役場、添付 鎌倉市深沢図書館蔵
(史料 3) 「碑表建設願 鐵井」『指導標碑文集』鎌倉町役場、添付 鎌倉市深沢図書館蔵

【写真】

- (写 1) 小坂藤若
(写 2) 小坂藤若「郷土を愛するが爲に」福光四郎編『鎌倉 大正十五年四月創刊號』鎌倉右門社、1926 年
(写 3) 「碑表建設願 鐵井」『指導標碑文集』鎌倉町役場、添付 鎌倉市深沢図書館蔵
(写 4) 『指導標碑文集』鎌倉町役場 鎌倉市深沢図書館蔵
(写 5) 「碑表位置図 鐵井」『指導標碑文集』鎌倉町役場、添付 鎌倉市深沢図書館蔵
(写 6) 「承諾書 鐵井」『指導標碑文集』鎌倉町役場、添付 鎌倉市深沢図書館蔵

【表】

- (表 1) 史蹟指導標一覧表
(表 2) 年表

碑表建設願

鎌倉市青年團長 藏並長勝

一、正碑總高サ八尺 高サ六尺 巾二尺五寸

彫刻文 義經宿陣之趾

文治元年（皇紀一八四五）五月源義經朝敵ヲ平ラゲ降將前内府平宗盛ヲ捕虜トシテ相具シ凱旋セシニ賴朝ノ不審ヲ蒙リ鎌倉ニ入ルコトヲ許サレズ腰越ノ驛ニ滞在シ鬱憤ノ餘因幡前司大江廣元ニ付シテ一通ノ欸狀ヲ呈セシコト東鑑ニ見ユ 世ニ云フ腰越狀ハ即チコレニシテ其ノ下書ト傳ヘラルヽモノ滿福寺ニ存ス

昭和十六年三月建 鎌倉市青年團

ニ、建碑ノ趣旨 義經宿陣之趾ヲ周知セシムル爲

三、建設ノ位置 鎌倉市腰越四百九拾貳番地

四、工費豫算 百九拾圓也

五、工事着手及竣工豫定

御許可後着手 昭和十六年三月三十一日迄ニ竣工

六、工費支途 本團費及縣市補助

七、碑表管理及維持方法 市及本團ニ於テ之ヲ爲ス

八、圖面壹葉 別紙添付 九、材質 仙臺石

右建設仕度此段及出願候也

昭和十五年十二月 日

鎌倉市青年團長 藏並長勝

鎌倉警察署長 堀内 當殿

碑表建設願

鎌倉市青年團長 藏並長勝

一、正碑總高サ八尺 高サ六尺 巾二尺五寸

彫刻文 朝夷奈切通

鎌倉七口ノ一ニシテ鎌倉ヨリ六浦ヘ通ズル要衝ニ當リ大切通小切通ノ二ツアリ土俗ニ朝夷奈三郎義秀一夜ノ内ニ切抜タルヲ以テ其名アリト傳ヘラルヽモ東鑑ニ仁治元年（皇紀一九〇〇）十一月鎌倉六浦間道路開鑿ノ議定アリ翌二年四月經營ノ事始アリテ執權北條泰時其所ニ監臨シ諸人群集シ各土石ヲ運ビシコト見ユルニ徴シ此切通ハ即チ其當時ニ於テ開通セシモノト思料セラル

昭和十六年三月建 鎌倉市青年團

ニ、建碑ノ趣旨 朝夷奈切通ヲ周知セシムル爲

三、建設ノ位置 鎌倉市十二所字七曲五八六番地

四、工費豫算 百九拾圓也

五、工事着手及竣工豫定

御許可後着手 昭和十六年三月三十一日迄ニ竣工

六、工費支途 本團費及縣市補助

七、碑表管理及維持方法 市及本團ニ於テ之ヲ爲ス

八、圖面壹葉 別紙添付 九、材質 仙臺石

右建設仕度此段及出願候也

昭和十五年十二月 日

鎌倉市青年團長 藏並長勝

鎌倉警察署長 堀内 當殿

碑表建設願

鎌倉市青年團長 藏 並 長 勝

一、正碑總高サ八尺 高サ六尺 巾二尺五寸

彫刻文 鐵井

鎌倉十井ノ一ナリ、水質清冽甘美ニシテ盛夏ト雖涸ルルコトナシ往昔此井中ヨリ高サ~~五~~五尺餘ノ首許リナル鐵觀音ヲ掘出シタルニヨリ鐵井ト名クトイフ、正嘉二年（皇紀一九一八）正月十七日丑ノ尅秋田城介泰盛ガ甘繩ノ宅ヨリ失火シ折柄ノ南風ニ煽ラレ火ハ藥師堂ノ後山ヲ越エ壽福寺ニ到リ墾内一字ヲモ殘サズ焼失セシメ餘焰ハ更ニ新清水寺窟堂、若宮寶藏同別當坊等ヲ焼亡セシメタルコト東鑑ニ見エタリ 此觀音ハ其ノ火災ニカカリ土中ニ埋モレシヲ掘出シタルモノナラン尊像ハ新清水寺ノ觀音ト傳ヘ後此井ノ西方ナル觀音堂ニ安置セラレシモ明治初年東京ニ移セリトイフ

昭和十六年三月建 鎌倉市青年團

ニ、建碑ノ趣旨 鐵井ヲ周知セシムル爲

三、建設ノ位置 鎌倉市雪ノ下字岩谷堂貳百六拾壹番地

四、工費豫算 百九拾圓也

五、工事着手及竣工豫定

御許可後着手 昭和十六年三月三十一日迄ニ竣工

六、工費支途 本團費及縣市補助

七、碑表管理及維持方法 市及本團ニ於テ之ヲ爲ス

八、圖面壹葉 別紙添付 九、材質 仙臺石

右建設支度此段及出願候也

昭和十五年十二月 日 鎌倉市青年團長 藏 並 長 勝

鎌倉警察署長 堀内 當 殿



小坂藤若『随筆 あとの鴉』1970年 巻頭頁より転載

小坂藤若 略歴

明治28年（1895）1月24日生まれ
鎌倉市大町の八雲神社宮司 兼 鎌倉町役場職員
鎌倉町青年団副団長
鎌倉市助役（1957～1959）
昭和54年（1979）8月18日逝去、享年84歳

※小坂藤若『随筆 あとの鴉』1970年 日誌・年譜より

郷土を愛するが爲に（小坂）

郷土を愛するが爲に

鎌倉町青年團
副團長
小坂 藤若

新しく月刊『鎌倉』の發行せらるゝことは私達鎌倉人にとつて極めて喜ばしいことであり、又『鎌倉』の使命が純眞なる鎌倉の研究と宣傳とにあると云ふことを伺

つて、私達郷土を愛する者は、双手を舉げ、之を歓迎する次第であります。従つて私達は本誌の昭調なる發展を祈り、其の使命の完成を心から期待してやまぬのであります。

就ては草紙若き録旨の團結である本に對しては、
圖の歴史とが事業とが、謂はる圖の消息の上に發表
する模型を求めたのでありき、所成の體裁上の要求
に應ずる様な氣のきた記録の持合せが、いので、と
りあへず年々の部分的な記録のうちに、採擷して、
一郷土を愛するが爲に、聊か逸へさして頂く
ことに致しました。とて簡單なる記録の發表にとど
まり、之に連絡して、名所舊蹟の案内と研究、郷土の
宣傳、郷土發展策に對する見解と云つた様な方面に迄
及んでみたいと思ひます。

郷土をなつかしむ心
郷土を誇る心

[illegible]

本報は斯る信念の下に、「郷土を愛するが爲に」郷土發展の上に如何にして貢獻すべきかと云ふ問題を、深く深く考慮致して居ります。即ち遺された史蹟と、自
然に恵まれた風物と、地の利と、かうした得難い特徴

倉

12

倉

錫

を有する鎌倉が、憑荒地宅地を乃至保倉地として、更に以上より上質の鎌倉、より以上上質より鎌倉を建設するには、如何なる考慮を用ひ、如何なる手段を講ずべきかと云ふ問題に直面して、常に親睦しつゝ之が事業化し、具體化を欲求に燃えてゐるのであります。

然しに斯る欲求のあらはれの一部分として、舊藩保存指標額の建設で、皇太子殿下御成婚記念植や、海水浴場の宣傳や、松木町の掃除等幾多の諸事業を数々果げることが出来るのであります。

元來録倉人はあまりに録倉の名に頼りすぎる嫌があります。故に自ら進んで郷土發展の爲に適當の畫策をめぐらすと云ふ嫌

郷土を愛するが爲に（小坂）

(既寫の君諸部餘國年青町倉鐵)



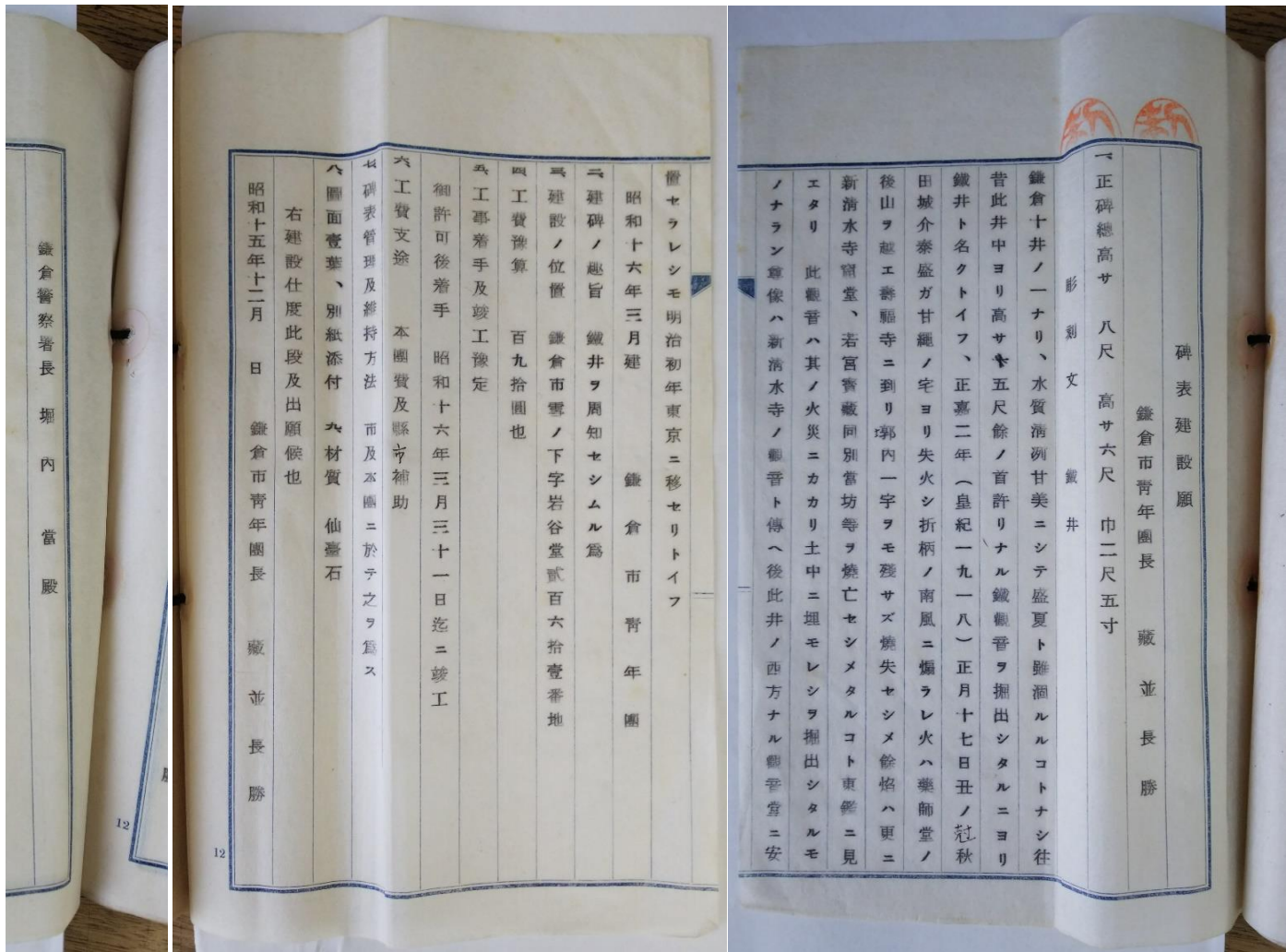
前列向つて右より
副議長 小坂善吉君、幹事安
齋銀三君、議長 山本和三郎
君、副議長 關佐平次君

後列向つて右より
幹事 進藤武一郎君、書記黒川
碩太郎君、幹事 松岡勝次郎君

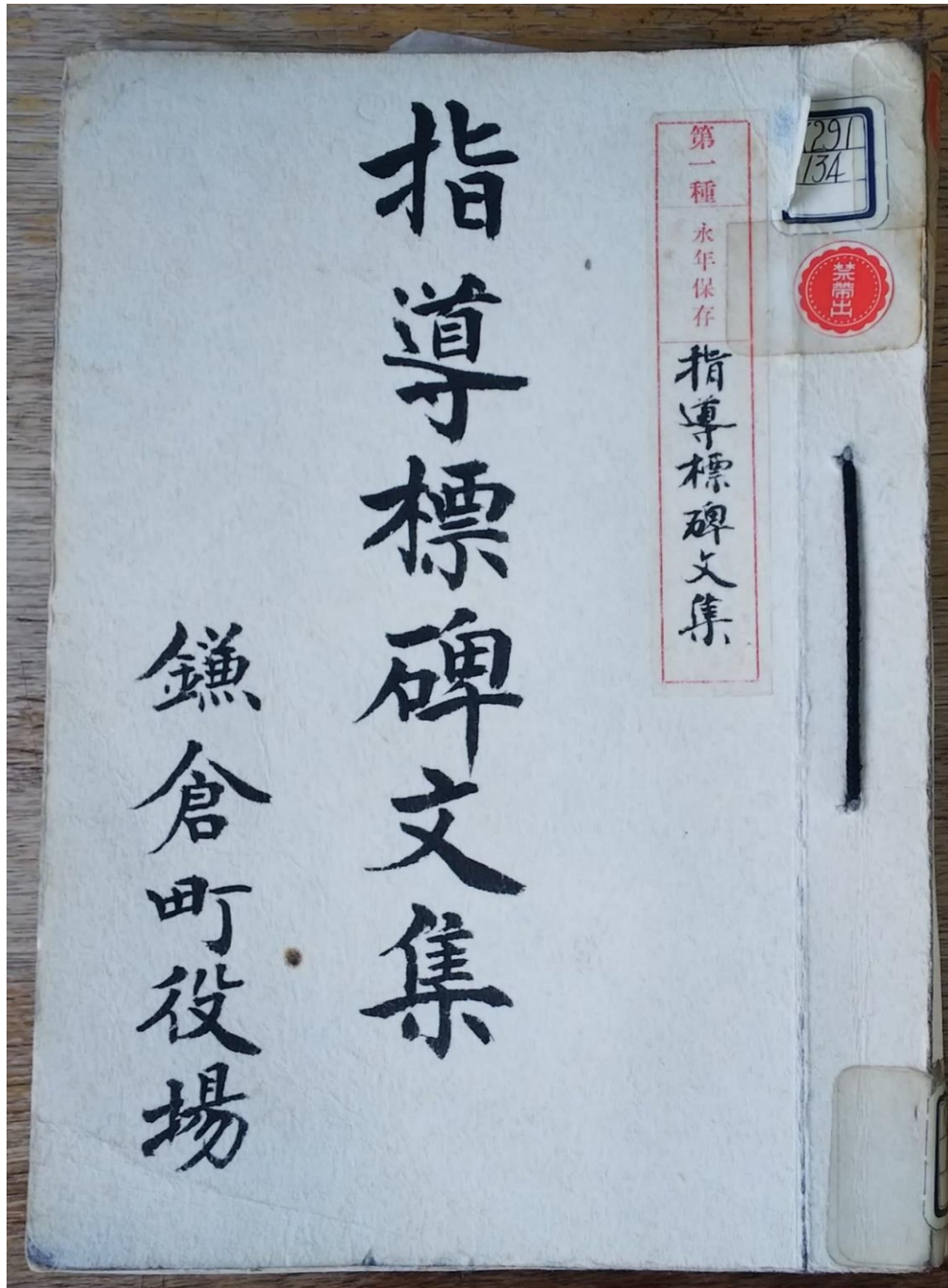
な、唯物的觀念に乏しい、手を袖に思はれまふ。幾言すれば、手を袖に思はれまふ。してお客の来るのを待たれり。通りすがりのお客をお互ひにひつぱりつこをしたたりするにどきどきり、通んでお客を吸ひ、自家の繁栄と市況の隆昌を賞讃せんとする努力が足りない様に思はれるのでありませう。でははやがて自滅するか自滅しない迄も以上への發展を遂ぐることは、到底至難であらうと考へられます。何となれば、近年交通機關の發達に伴ひ、之を利用して新しい住地を建設や、新しい新所置地の經營や、新しい海水浴場經營地の宣傳や、其他の幾多の力強、貴族が私達の身邊に迫りつゝあるからであります。彼の房總地方が鐵道の開通と共に、年々海水浴場の宣傳に全力

三九

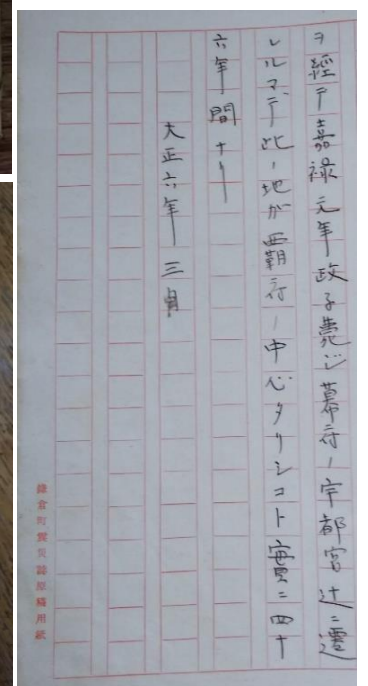
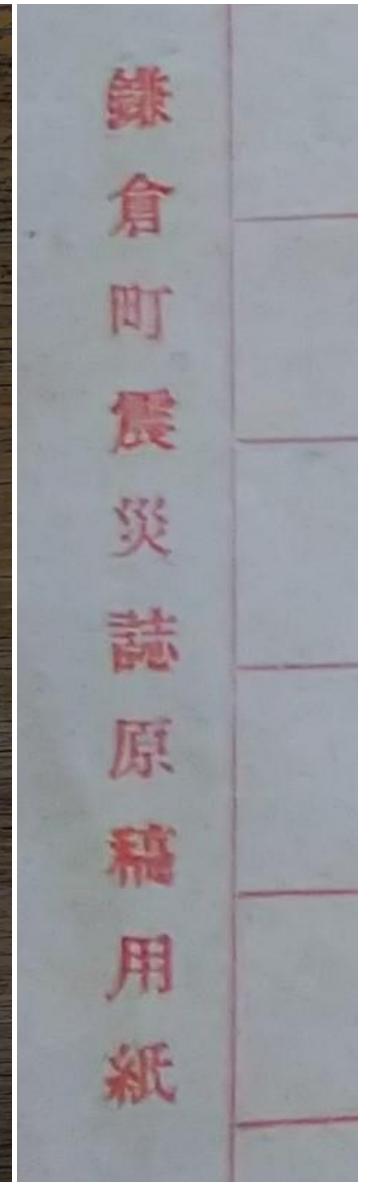
写3 「碑表建設願 鐵井」
『指導標碑文集』鎌倉町役場、添付 鎌倉市深沢図書館蔵

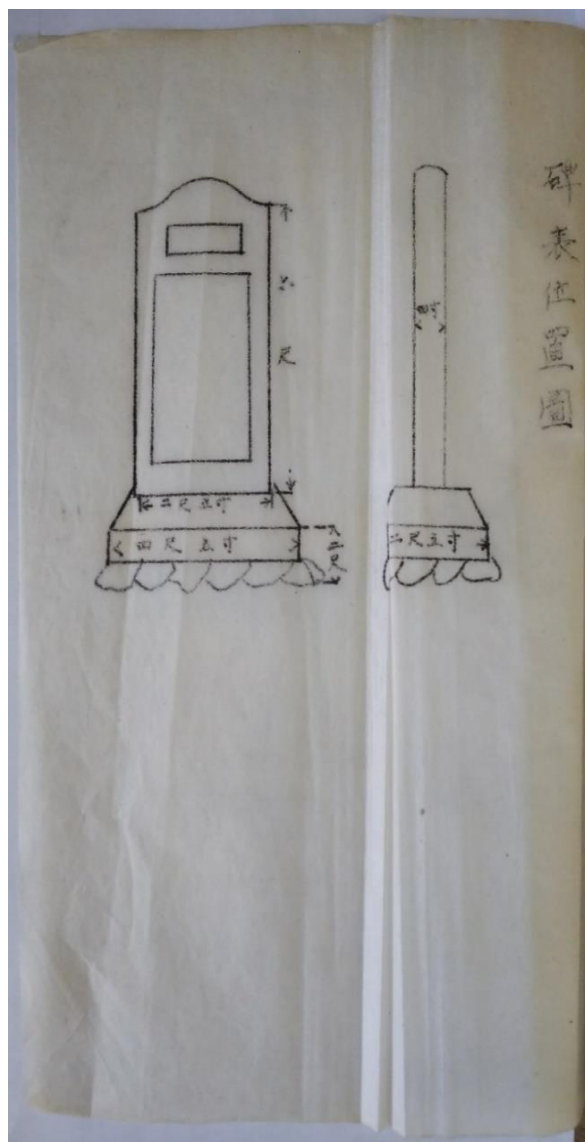
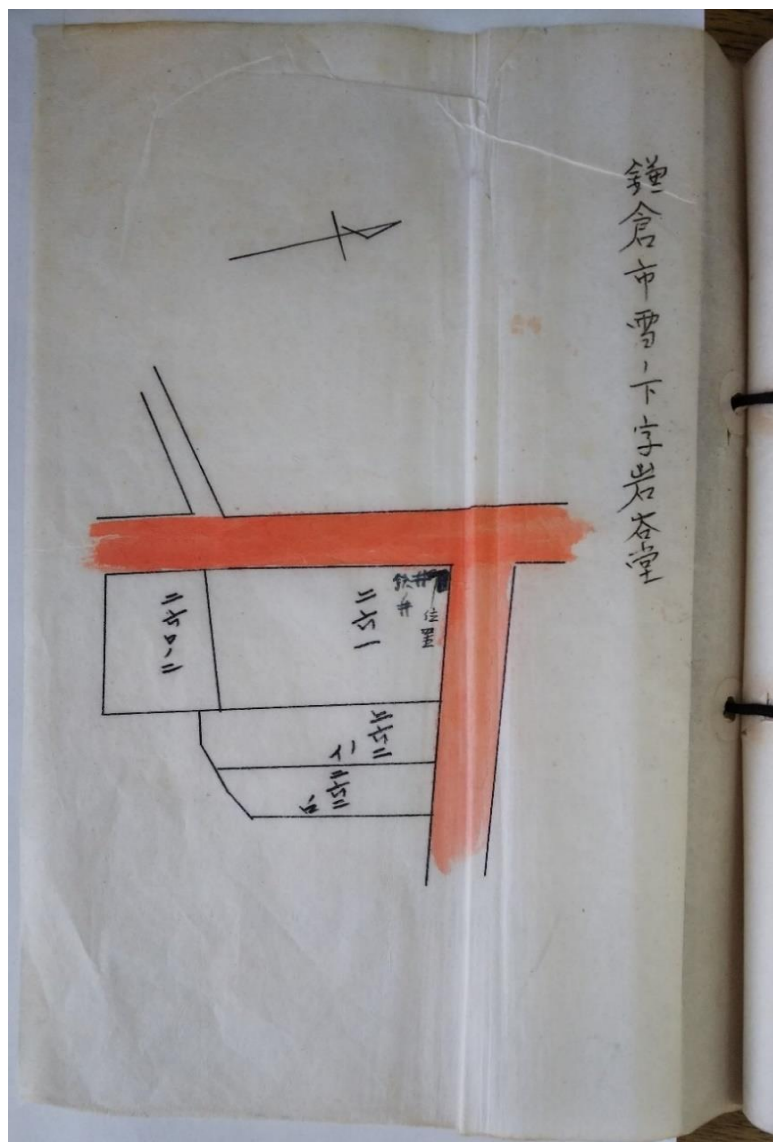


①外観



②原稿用紙一部拡大





承諾書

碑表建設、為鎌倉市雪下字岩谷堂
貳百六拾壹番地、土地無料使用、件

承諾人
昭和十五年十一月 日
鎌倉市雪下一四六
土地所有者 梶田幸次郎

鎌倉市青年團長藏並長勝殿

表1 史蹟指導標一覧表

[建立年代順]

表題	建立年		建立団体	所在地	
	和暦	西暦		住所	旧所在町村
勝長壽院舊蹟	大正6年3月	1917年	3月 鎌倉町青年会	○雪ノ下4丁目6-20	旧鎌倉町◇
大藏幕府舊蹟	大正6年3月	1917年	3月 鎌倉町青年会	○雪ノ下3丁目11-45	旧鎌倉町◇
俊基朝臣墓所	大正6年3月	1917年	3月 鎌倉町青年会	○梶原5丁目9-1 葛原岡神社境内	旧深沢村◆
問注所舊蹟	大正6年3月	1917年	3月 鎌倉町青年会	○御成町9-18	旧鎌倉町◇
稲村崎	大正6年3月	1917年	3月 鎌倉町青年会	○稲村ガ崎1丁目19	旧鎌倉町◇
段葛	大正7年3月	1918年	3月 鎌倉町青年会	○小町2丁目10-13付近	旧鎌倉町◇
若宮大路幕府舊蹟	大正7年3月	1918年	3月 鎌倉町青年会	○雪ノ下1丁目11-21	旧鎌倉町◇
東勝寺舊蹟	大正7年3月	1918年	3月 鎌倉町青年会	○小町3丁目10	旧鎌倉町◇
北條執権邸舊蹟	大正7年3月	1918年	3月 鎌倉町青年会	○小町3丁目5-22 宝戒寺敷地内	旧鎌倉町◇
二十五坊舊蹟	大正7年3月	1918年	3月 鎌倉町青年会	○雪ノ下2丁目17-22	旧鎌倉町◇
饑渴峠	大正7年12月	1918年	12月 鎌倉同人会	□由比ガ浜1丁目3-11	旧鎌倉町◇
足利公方邸舊蹟	大正9年3月	1920年	3月 鎌倉町青年会	○浄明寺4丁目2-25	旧鎌倉町◇
永福寺舊蹟	大正9年3月	1920年	3月 鎌倉町青年会	○二階堂178	旧鎌倉町◇
阿佛邸舊蹟	大正9年3月	1920年	3月 鎌倉町青年会	○極楽寺3丁目12-8付近	旧鎌倉町◇
宇津宮辻幕府舊蹟	大正10年3月	1921年	3月 鎌倉町青年会	○小町2丁目15-19	旧鎌倉町◇
青砥藤綱邸舊蹟	大正10年3月	1921年	3月 鎌倉町青年会	○浄明寺5丁目2-3	旧鎌倉町◇
太田道灌邸舊蹟	大正10年3月	1921年	3月 鎌倉町青年会	○扇ガ谷1丁目16-3 英勝寺敷地内	旧鎌倉町◇
文覺上人屋敷迹	大正11年3月	1922年	3月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下4丁目4-32	旧鎌倉町◇
扇谷上杉管領屋敷迹	大正11年3月	1922年	3月 鎌倉町青年团	◎扇ガ谷2丁目3-3	旧鎌倉町◇
畠山重保邸址	大正11年3月	1922年	3月 鎌倉町青年团	◎由比ガ浜2丁目14-5	旧鎌倉町◇
畠山重忠邸址	大正12年3月	1923年	3月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下3丁目2-9	旧鎌倉町◇
比企能員邸址	大正12年3月	1923年	3月 鎌倉町青年团	◎大町1丁目13-10	旧鎌倉町◇
稲瀬川	大正12年3月	1923年	3月 鎌倉町青年团	◎長谷2丁目7-20付近	旧鎌倉町◇
法華堂跡	大正13年3月	1924年	3月 鎌倉町青年团	◎西御門2丁目1-24	旧鎌倉町◇
和賀江島	大正13年3月	1924年	3月 鎌倉町青年团	◎材木座6丁目23-2	旧鎌倉町◇
土佐坊昌俊邸址	大正14年3月	1925年	3月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下1丁目14-24	旧鎌倉町◇
大江廣元邸址	大正14年3月	1925年	3月 鎌倉町青年团	◎十二所921-3	旧鎌倉町◇
足達盛長邸址	大正14年3月	1925年	3月 鎌倉町青年团	◎長谷1丁目12-1	旧鎌倉町◇
玉縄城址	大正15年1月	1926年	1月 鎌倉同人会	□城廻200 清泉女学院内	旧玉縄村▲
木曾冠者義高之塚	大正15年1月	1926年	1月 鎌倉同人会	□大船5丁目15-19	旧小坂村▼
永安寺址	大正15年3月	1926年	3月 鎌倉町青年团	◎二階堂729 植政造園敷地内	旧鎌倉町◇
東御門	大正15年3月	1926年	3月 鎌倉町青年团	◎西御門2丁目8-10	旧鎌倉町◇
西御門	大正15年3月	1926年	3月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下3丁目6-4付近	旧鎌倉町◇
星月井	昭和2年3月	1927年	3月 鎌倉町青年团	◎坂ノ下18-27	旧鎌倉町◇
大慈寺跡	昭和3年3月	1928年	3月 鎌倉町青年团	◎十二所66	旧鎌倉町◇
源氏山	昭和3年3月	1928年	3月 鎌倉町青年团	◎扇ガ谷1丁目13-45	旧鎌倉町◇
元八幡	昭和3年3月	1928年	3月 鎌倉町青年团	◎材木座1丁目7-9 由比若宮敷地内	旧鎌倉町◇
藤谷黄門遺蹟	昭和4年3月	1929年	3月 鎌倉町青年团	◎扇ガ谷2丁目11-20	旧鎌倉町◇
乱橋	昭和4年3月	1929年	3月 鎌倉町青年团	◎材木座3丁目15-8	旧鎌倉町◇
塔之辻	昭和4年3月	1929年	3月 鎌倉町青年团	◎笹目町5-44	旧鎌倉町◇
荏柄天神	昭和4年12月	1929年	12月 鎌倉町青年团	◎二階堂76-11	旧鎌倉町◇
今宮	昭和4年12月	1929年	12月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下2丁目18-25	旧鎌倉町◇
萬葉集研究遺蹟	昭和5年2月	1930年	2月 鎌倉町青年团	◎大町1丁目15-1 妙本寺敷地内	旧鎌倉町◇
關取場跡	昭和6年3月	1931年	3月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下562-10	旧鎌倉町◇
太平寺跡	昭和6年3月	1931年	3月 鎌倉町青年团	◎西御門1丁目11-1 来迎寺敷地内	旧鎌倉町◇
長楽寺跡	昭和6年3月	1931年	3月 鎌倉町青年团	◎長谷1丁目4-1	旧鎌倉町◇
十一人塚	昭和6年3月	1931年	3月 鎌倉町青年团	◎稲村ガ崎1丁目15-24	旧鎌倉町◇
理智光寺址	昭和7年3月	1932年	3月 鎌倉町青年团	◎二階堂754	旧鎌倉町◇
相馬次郎師常之墓	昭和7年3月	1932年	3月 鎌倉町青年团	◎扇ガ谷2丁目10-28	旧鎌倉町◇
夷堂橋	昭和7年3月	1932年	3月 鎌倉町青年团	◎大町1丁目12-12 本覚寺敷地内	旧鎌倉町◇
佐竹屋敷跡	昭和7年3月	1932年	3月 鎌倉町青年团	◎大町3丁目6-22 大寶寺敷地内	旧鎌倉町◇
辨谷	昭和7年3月	1932年	3月 鎌倉町青年团	◎材木座6丁目9-21	旧鎌倉町◇
極楽寺坂	昭和7年3月	1932年	3月 鎌倉町青年团	◎坂ノ下18-28付近	旧鎌倉町◇
柳原	昭和9年3月	1934年	3月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下2丁目1-31 鶴岡八幡宮敷地内	旧鎌倉町◇
蓮華寺址	昭和9年3月	1934年	3月 鎌倉町青年团	◎佐助1丁目13-6	旧鎌倉町◇
聖福寺址	昭和9年3月	1934年	3月 鎌倉町青年团	◎稲村ガ崎5丁目39-7	旧鎌倉町◇
上杉朝宗及氏憲邸址	昭和9年3月	1935年	3月 鎌倉町青年团	◎浄明寺1丁目10-3	旧鎌倉町◇
偏界一覽亭舊跡	昭和10年3月	1935年	3月 鎌倉町青年团	◎二階堂710 瑞泉寺敷地内	旧鎌倉町◇
主馬盛久之頸坐	昭和10年3月	1935年	3月 鎌倉町青年团	◎長谷1丁目7-2	旧鎌倉町◇
日蓮聖人辻説法之址	昭和11年3月	1936年	3月 鎌倉町青年团	◎小町2丁目22	旧鎌倉町◇
藤原仲能之墓	昭和11年3月	1936年	3月 鎌倉町青年团	◎梶原5丁目9-1 葛原岡神社境内	旧深沢村◆
町屋址	昭和11年3月	1936年	3月 鎌倉町青年团	◎大町2丁目3-2	旧鎌倉町◇
歌之橋	昭和12年3月	1937年	3月 鎌倉町青年团	◎二階堂935	旧鎌倉町◇
源平池	昭和12年3月	1937年	3月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下2丁目1-31 鶴岡八幡宮敷地内	旧鎌倉町◇
下馬	昭和12年3月	1937年	3月 鎌倉町青年团	◎由比ガ浜2丁目1-20	旧鎌倉町◇
青砥藤綱旧蹟	昭和13年3月	1938年	3月 鎌倉町青年团	◎小町3丁目4-1	旧鎌倉町◇
荒居閻魔堂址	昭和13年3月	1938年	3月 鎌倉町青年团	◎材木座5丁目11-9	旧鎌倉町◇
針磨橋	昭和13年3月	1938年	3月 鎌倉町青年团	◎極楽寺3丁目11-19	旧鎌倉町◇
筋替橋	昭和14年3月	1939年	3月 鎌倉町青年团	◎雪ノ下3丁目3-21付近	旧鎌倉町◇
日蓮上人草菴址	昭和14年3月	1939年	3月 鎌倉町青年团	◎大町4丁目4-18 安国論寺敷地内	旧鎌倉町◇
染屋太郎大夫時忠邸址	昭和14年3月	1939年	3月 鎌倉町青年团	◎長谷2丁目4-5	旧鎌倉町◇
假粧坂	昭和15年3月	1940年	3月 鎌倉市青年团	●扇ガ谷4丁目14-6	旧鎌倉町◇
松谷寺及佐介文庫址	昭和15年3月	1940年	3月 鎌倉市青年团	●佐助1丁目16-17	旧鎌倉町◇
宿谷光則屋敷跡	昭和15年3月	1940年	3月 鎌倉市青年团	●長谷3丁目9-7 光則寺境内	旧鎌倉町◇
朝夷奈切通	昭和16年3月	1941年	3月 鎌倉市青年团	●十二所	旧鎌倉町◇
鐵井	昭和16年3月	1941年	3月 鎌倉市青年团	●雪ノ下1丁目8-20	旧鎌倉町◇
義経宿陣之址	昭和16年3月	1941年	3月 鎌倉市青年团	●腰越2丁目4-8 満福寺境内	旧腰越津村■
日蓮上人祈雨旧跡	昭和31年3月	1956年	3月 鎌倉友青会	●七里ガ浜1丁目15-22	旧腰越津村■
洲崎古戦場	昭和31年3月	1956年	3月 鎌倉友青会	●寺分460付近	旧深沢村◆
玉縄城址	昭和31年3月	1956年	3月 鎌倉友青会	●植木433-6	旧玉縄村▲
80基				◇旧鎌倉町域内72基、その他8基	



大藏幕府舊蹟
大正6年3月 鎌倉町青年会



大江廣元邸址
大正14年3月 鎌倉町青年团



木曾冠者義高之塚
大正15年1月 鎌倉同人会



大慈寺跡
昭和3年3月 鎌倉町青年团



假粧坂
昭和15年3月 鎌倉市青年团



日蓮上人祈雨旧跡
昭和31年3月 鎌倉友青会

※ 史蹟指導標写真:筆者撮影

○鎌倉町青年会16基、◎鎌倉町青年团52基、●鎌倉市青年团6基、●鎌倉友青会3基、□鎌倉同人会3基

			小坂藤若		青年会・青年団		鎌倉同人会	鎌倉町・鎌倉市
			年齢		名称	会長・ 団長		
明治18年	(1885)							鎌倉保勝会設立
明治22年	(1889)	4月1日						町村制施行 西鎌倉村・東鎌倉村・腰越津村・小坂村・玉縄村・深沢村発足
明治27年	(1894)	7月7日						東鎌倉村・西鎌倉村合併、鎌倉町発足
明治28年	(1895)	1月24日	0歳	鎌倉町大町1195番地において、父多満喜、母エイの長男として出生				
明治41年	(1908)							鎌倉倶楽部設立
		3月31日	13歳	鎌倉町立鎌倉小学校高等3年卒業				
		4月1日		私立逗子開成中学校入学				
明治43年	(1910)	2月27日	15歳		養徳青年会発足(小坂村)			
		7月10日			深沢村青年会発足			
		9月24日			玉縄青年会発足			
		10月			名称	会長・ 団長		鎌倉保勝会、「鎌倉十井」・「鎌倉十橋」石碑建立
明治44年	(1911)	3月12日	16歳		犬山初蔵		鎌倉青年会発足、会長犬山初蔵町長	
		3月31日		私立逗子開成中学校3年修了、4年進学				
		10月		私立逗子開成中学校健康上の理由で退学				
		8月15日						
大正3年	(1914)	9月1日	19歳	東京皇典講究所神職養成部教習科入学				
		10月10日						旧蹟保存基金蓄積及管理規定を可決(5,000円蓄積し利子を充当)
大正4年	(1915)	1月5日	19歳				鎌倉同人会発会式	
		5月7日		徴兵検査、甲種合格				
		6月30日	20歳	東京皇典講究所神職養成部の課程を卒業、神職の資格を取得				
		12月11日		入宮、近衛騎兵連隊第一中隊に編入				
大正5年	(1916)	7月20日	21歳					県へ旧蹟保存費補助願提出
		7月28日						県へ旧蹟保存費補助願提出
大正6年	(1917)	2月6日	22歳		鎌倉町青年会		犬山初蔵初代団長、鎌倉町長辞任	
		2月9日						前年補助願提出2件分旧蹟保存費合計118円県より交付
		3月					鎌倉町青年会史蹟指導標建碑を開始、5基を建立	
		7月16日						県へ旧蹟保存費補助願提出
		11月26日		婦除隊				
大正7年	(1918)	12月26日						7月補助願提出分旧蹟保存費24円県より交付
		3月	23歳				前年に引き続き、史蹟指導標5基を建立	
		4月16日		鎌倉町役場臨時雇に採用				
		6月30日		任・書記補				
		11月					史蹟「六地藏」を改修し、町に寄付	
大正8年	(1919)	12月					改修した六地藏敷地内に史蹟指導標「饑渴島」建立	
		12月23日		任・書記				
		5月31日	24歳				鎌倉町青年会が旧蹟保存費補助願を町会に提出	
		11月25日					5月補助願提出分旧蹟保存費150円町会交付決定	
大正9年	(1920)	3月	25歳				史蹟指導標3基を建立、以後毎年3基づつの建立を継続	
		3月15日		町の在郷軍人分会と青年団の連合総会出席			鎌倉町青年会・鎌倉町在郷軍人分会連合総会開催(10時鎌倉小学校講堂)	
		4月21日		星野トキと結婚				
大正10年	(1921)	2月24日	26歳	鎌倉町青年会幹部会にて、新たに鎌倉町青年団と改称した団の幹事に決定する	村田久吉		青年会幹部会(17時鎌倉小学校)、青年会から青年団への会名変更を決定 団長村田久吉、副団長鶴見欣之輔、山本和二郎、監事に宮本慶次郎、関佐平次、新藤舜、当間行浩、小坂藤若、役員に決定(会名を機に町の天下り式の会長制を排し、民間から代表を推挙)	
		3月					鎌倉町青年会銘最後の史蹟指導標3基を建碑	
		3月13日		鎌倉郡各町村在郷軍人分会と青年団の連合総会出席			鎌倉郡各町村青年団と在郷軍人分会の連合総会開催(10時戸塚小学校)	
		5月16日		夕より役場にて鎌倉町青年団幹部会に出席			幹部会(夕:役場)にて、史蹟指導標建設について協議 東勝寺趾、文覚上人趾、上杉管領屋敷趾を本年建設予定地に指定	
		5月17日		午前中、史蹟指導標建設予定地実地踏査 16時より村田団長による慰労会に出席			午前中、幹部により史蹟指導標建設予定地を実地踏査 結果、文覚上人趾、刀工正宗邸趾、畠山重保墓に変更	
大正11年	(1922)	8月					団長村田久吉、鎌倉同人会の理事に就任	鎌倉町青年団長村田久吉、理事に就任
		3月3日	27歳	十二所支部旗授与式(8時十二所神社) 浄妙寺支部旗授与式(その後、熊野神社) 鎌倉町青年団総会(12時半鎌倉小学校講堂)参加			十二所支部旗授与式(8時十二所神社) 浄妙寺支部旗授与式(その後、熊野神社) 鎌倉町青年団総会(12時半鎌倉小学校講堂)開催	
		5月1日		史蹟指導標3基の建立作業を実施			鎌倉町青年団銘最初の史蹟指導標3基の設置作業を実施	
大正12年	(1923)	11月23日						旧蹟保存基金蓄積及管理規定の一部改正
		9月1日	28歳	関東大震災、八雲神社被災				関東大震災
大正13年	(1924)	9月					大震災救護のため、消防組・在郷軍人分会・青年団の三団体が連合体を組織	
		1月	29歳				大震災救護三団体連合体、解散	
大正14年	(1925)	6月5日					消防組・在郷軍人分会・青年団三団体の合同体、鎌倉三星会を発会	
		8月	30歳		山本和 三郎		この年、副団長山本和二郎、団長就任	
		8月6日		鎌倉町会、鎌倉震災志編纂委員会委員を委嘱。以後編纂作業に専従			青年団主催、報知新聞社後援海浜博覧会復活開催	
大正15年	(1926)	1月	31歳					
		3月31日		任・鎌倉町主事			小坂村、玉縄村に各1基の史蹟指導標を建碑	
		4月1日		福光四郎編『鎌倉 大正十五年四月創刊號』鎌倉右門社に「郷土を愛するが爲に」寄稿、鎌倉町青年団・史蹟指導標について記す。			小坂藤若、副団長の肩書で福光四郎編『鎌倉 大正十五年四月創刊號』鎌倉右門社に「郷土を愛するが爲に」寄稿	

表 2 年表

			小坂藤若		青年会・青年団		鎌倉同人会	鎌倉町・鎌倉市
			年齢		名称	会長・ 団長		
昭和2年	(1927)		32歳		鎌倉町青年団	加納義雄	この年、関佐平次、団長就任	
昭和3年	(1928)	7月24日	33歳	父多満喜死去、8月4日家督相続		加納義雄	この年、役場職員加納義雄、団長就任	
		8月28日		村社八雲神社本務社掌、他11社兼務社掌				
		9月3日					村田久吉元団長、町会議員選挙当選	
昭和4年	(1929)	12月	34歳			宮本慶次郎	この年か翌年、宮本慶次郎、団長就任	
昭和5年	(1930)	12月25日	35歳	『鎌倉震災志』発行			元団長加納義雄、鎌倉町収入役就任(昭和16年10月31日まで)	
昭和6年	(1931)	4月15日	36歳	鎌倉町役場退職		黒川國憲		
		10月15日					鎌倉町青年団長黒川國憲:鎌倉郡聯合青年團『團報 創刊號』記載	
昭和7年	(1932)	9月15日	37歳	鎌倉郡戸塚町役場就職、事務嘱託		井上甚平	鎌倉町青年団主催講演会開催(団長井上甚平名にて開催通知)	
		11月21日						小坂、玉縄両村合併大船町発足
昭和8年	(1933)	4月1日	38歳			鎌倉町青年団		
		4月7日		戸塚町助役に選任				
昭和9年	(1934)	5月5日	39歳			浅羽権太郎	鎌倉町青年団総会開催(団長浅羽権太郎名にて開催通知)	
昭和10年	(1935)	6月9日	40歳				鎌倉町青年団総会開催(団長浅羽権太郎名にて開催通知)	
昭和11年	(1936)	5月5日	41歳				鎌倉町青年団総会開催(団長藤原玄通名にて開催通知)	
		9月10日					藤原玄通団長、町会議員選挙再選	
昭和12年	(1937)	4月6日	42歳	戸塚町助役任期満了		鎌倉町青年団		
昭和13年	(1938)	1月	43歳			藤原玄通	『團報創刊號』発行	
		1月27日		戸塚町退職、即日鎌倉町に復帰、任・主事、市制施行準備事務に専従				
		4月3日					神奈川県連合青年団総会(横浜市)	
		4月10日					鎌倉郡連合男女青年団総会(鎌倉町第一小学校に於て)	
		4月22日					この日、史蹟指導標3基を建碑(「鎌倉町青年団事業報告」米村柳蔵編『團報 昭和14年号』鎌倉町青年団事務所、P.43より)	
		5月1日					帝国在郷軍人鎌倉町分会総会に藤原団長参列(第一小学校に於て)	
		5月15日				蔵並長勝	昭和13年度鎌倉町青年団総会(第一小学校に於て)	
		5月27日					鎌倉町青年団長藤原玄通辞任	
		6月14日					鎌倉町青年団長蔵並長勝就任(前副団長)	
		12月5日		腰越町議会合併問題協議会に清川町長以下臨時町勢振興委員会委員9名と共に出席				
		12月21日		臨時町勢振興委員会島森委員と共に内務省地方財務局に赴き町村税不均一課税の是非を聴取				
		12月28日					『團報第二號』発行	
昭和14年	(1939)	11月3日	44歳		鎌倉市青年団	蔵並長勝	米村柳蔵編『團報 昭和14年号』鎌倉町青年団事務所、発行	
		11月3日		腰越町との合併による市制施行により鎌倉市発足、任、主事			腰越町との合併による市制施行により鎌倉市青年団へ改名	腰越町合併・市制施行により鎌倉市発足
昭和15年	(1940)	2月21日	45歳				前団長藤原玄通(54)、第1回市議会議員選挙当選	
		3月					鎌倉市青年団として初の史蹟指導標3基を建碑	
		7月15日					鎌倉市青年団歌選定	
昭和16年	(1941)	3月	46歳			鎌倉市青年団	戦前最後の史蹟指導標3基を建碑、以後、建碑事業は鎌倉町青年団解散と共に中止	
		3月30日					『鎌倉』発行	
		4月24日		任、観光課長、12月28日任、戸籍社会課長				
		4月～7月					鎌倉市青年団解散	
		4月～7月				鎌倉市青年団	鎌倉市壮年団結成	
		8月23日					『鎌倉 再版』発行	
昭和20年	(1945)	4月1日	50歳		鎌倉市青年団	蔵並長勝	元団長加納義雄、鎌倉市収入役辞任	
		5月28日		任・厚生課長、10月31日任・腰越支所長				
		6月25日						
昭和21年	(1946)	6月25日	51歳	宗教法人令施行に伴い、宗教法人八雲神社官司に補せられる大町八雲町内会会長		鎌倉市青年団		
昭和22年	(1947)	4月30日	52歳				鎌倉市議会議員選挙 元鎌倉市青年団長蔵並長勝・元鎌倉市青年団副団長小坂喜男当選	
		5月17日		任・民政課長、9月4日衛生課独立に伴い、任・衛生課長				
昭和23年	(1948)	1月1日	52歳					鎌倉市、深沢村と合併
		6月1日	53歳					鎌倉市、大船町と合併
		8月1日		神奈川県神社庁鎌倉支部長委嘱				
昭和24年	(1949)	5月15日	54歳				鎌倉市議会議員選挙、蔵並長勝当選	
昭和27年	(1952)	11月	57歳			鎌倉市青年会	『鎌倉 改訂三版』発行	
昭和28年	(1953)	5月12日	58歳				鎌倉市議会議員選挙、蔵並長勝当選	
昭和30年	(1955)	10月1日	60歳	任・民生部長				
昭和31年	(1956)	3月	61歳				鎌倉市青年会、戦後初となる史蹟指導標3基を建碑 以後の建碑計画は実現せず、最後の建碑となる	
		秋					史蹟保護顕彰の功により鎌倉市より表彰	
昭和32年	(1957)	1月15日	62歳			鎌倉市青年会	『鎌倉 改訂四版』発行、鎌倉市青年会会員23名	
		5月10日					鎌倉市議会議員選挙、蔵並長勝当選	
昭和33年	(1958)	11月1日	63歳	鎌倉市助役に選任				
		3月8日					元鎌倉町青年団長村田久吉死去	
		7月17日		市長死去に伴い、市町職務代理者となる				
昭和34年	(1959)	8月2日	64歳	鎌倉市助役を退職				
		5月30日		議会にて、退職加給金50万円支給承認				
昭和35年	(1960)	4月1日	65歳				元鎌倉市青年団副団長小坂喜男、鎌倉市消防団長就任	
昭和38年	(1963)	1月25日	68歳				元鎌倉町青年団長蔵並長勝死去、享年59歳	
昭和39年	(1964)	4月1日	69歳				元青年団書記内田源太郎、鎌倉市収入役就任	
昭和40年	(1965)	3月28日	70歳	神奈川県神社庁副庁長に推薦(～昭和42年)	鎌倉市青年会	不明		
昭和45年	(1970)	2月2日	75歳	鎌倉市郷土芸能保存協会会長に推薦				
昭和54年	(1979)		84歳					
		8月18日		死去				

Commemorational Monuments (Shisekishidou-hyou) Constructed by the Modern
Kamakura–Machi Youth Group: An Analysis of the Details of the Monuments
Through the Written Records of Fujiwaka Kosaka

Yoichi Kishimoto

This study scrutinized the significance of the recognition of the commemorative monuments (Shisekishidou-hyou) in Japan, as such recognition may have influenced the formation of regional identities in Modern Japan. It focused on the stone structures erected as monuments in Kamakura City, Kanagawa Prefecture, to commemorate historical events, thereby highlighting a deep connection and the significance of personalities associated with them. Moreover, these monuments are inscribed with a brief description of the relevant historical event to which they are linked.

Further, to ascertain the intent and the background for their construction, this study focused on Fujiwaka Kosaka, who served as a Deputy Director of the Kamakura–Machi Youth Group, which constructed such monuments. Kosaka was the Head Priest of the Yakumo Taisha Shrine, which was constructed in Kamakura during the Middle Ages. His written records/contributions to regional magazines and various notes, which were published in his latter years, were used to elucidate the specific processes employed when constructing these stone monuments.

Since the onset of the modern era, Kamakura has developed into being a vital historical hotspot for Tokyo. Moreover, through the construction of the commemorative monuments, Kosaka and others have attempted to revive Kamakura's regional identity by highlighting its history and traditions during the medieval period. The Kamakura–Machi Youth Group, which was at the center of the movement, continued the construction of the commemorative monuments for approximately 20 years with the help of government's financial support.

However, after WWII, the construction of the commemorative monuments was discontinued, having almost no followers. Identity formation through recognition of local history is thus a determinant of Modern Japan and a typical example of the importance of the commemorative monuments.